

眠れる女

——ヴァントウイユの△小楽節▽（5）——

川中 弘

話者のアルベルチヌへの愛は一言でいえばたえず不安と苦悩にある。ところがその不安や苦悩が収まり、だからといって彼女との同棲生活に倦きがくるというのでもなく、まさに愛の至福に到達する稀有な瞬間が訪れないわけではない。ただそれは彼女が眠っているのを眺めるという、普通の愛からは逆説的というしかない時に起こるのである。しかし、相手の女性が意識を失ってコミュニケーションが閉じた状態ではじめて「純粋な愛」が成立するという、その愛とは一体何なのか？

一 ドンジュアニスム

『失われた時』の統一的主題を考えようとすると、作家という天職自覚の過程がまず挙げられるだろう。たしかに話者Ⅱ主人公の到達した最終地点から振り返ってみれば、その歩みは作家への歷程として単純化可能である。しか

しそうした要約は、この作品のおそらく最も重要な、そして最も豊かな主題をとり逃がすことになるだろう。主人公の成長なり行動の軌跡を、一切の予断を離れて辿ってみると、そこに浮かびあがるのはその種の審美的探求者とは全く無縁とも思われる一個の強烈な amoureux の姿だからである。そのことは充分に気がつかれたろうか。たしかに多くの研究が多かれ少なかれその問題に言及している。だがその注目は問題の重みにつりあうほどのものでは決してなかったように思われる。ブルースト論に愛の一章を割くことをいとわない批評家たちも、それを占める本当の位置を測定することには熱心ではなかった。ましてそれが作品の中枢に通じているとは想像さえされなかったのではないか。

愛とはたとえば、文学・芸術との対立において否定される人生の一経験でしかなかったし（ボネ）、それ自体に主観的に着目しても、性急にフランス・モラリスムの伝統に位置づけて、作家の心理的洞察に驚嘆すればそれごとがたりていた（A・モロワ）のではないか。いや、G・ブレは多分それ以上の注意を払っている。「愛は『失われた時』において、スワン、話者、サンリール、シャルリュスに割いた頁数からいっても、登場人物の思考と行動における役割からいっても重要な位置を占める」と。⁽¹⁾ところがこうして認められたかに見える主題的重要性も、すぐに限定され、殆ど否定さえされるだろう。「体験するものにはそれがただ苦しく圧倒的なものであらうと、愛は『失われた時』において挿話でしかない」。⁽²⁾そのうえ六〇年代頃から新しい批評傾向の擡頭とあいまって、もはや愛は主題として取立てて論じるだけの威光や魅力がなくなり、他の問題の背後に押しやられた感がある。もつとも八〇年代に入っても総合タイプの研究書はやはりこの主題に一瞥を投げざるをえないだろう。M・レモン『小説家ブルースト』はそれに捧げた一章「情念の経験」を次のように始める、「愛の情念の経験は『失われた時』において、それが小説に占める拡がり、それが話者に、そしてそれ以前にスワンに惹き起こす動揺と苦悩の強さによっ

て本質的な位置を占めている」。⁽³⁾ G・ブレとほぼ同じ見解である。そして折角認められたかにみえる本質的な位置が、結局充分に尊重されないのも同様だといつていいだろう。その目次から判るように愛は幾つかある主題の一つ以上のもではなく、決して中心的とはみなされていないのである。J・J・タディエも「ある力強い、しかし充たされないために悲痛な欲望が物語を貫いている」⁽⁴⁾とこのテーマの遍在的性格を指摘する。しかしここでもそれにふさわしい追求は、若干の細部への言及をのぞけば殆ど行われていない。これらの矛盾は、すでに審美的解釈と呼んだものに縛られて、このテーマの重要性に気付きながらそれに見合うだけの位置を既製のブルーストの問題系の枠内に見つけることができず、さりとて新たにそれをきり拓くだけの視点にも欠けていた、ということではないだろうか。

となると愛の「本質的な位置」を登場人物に即して、今更めくが、そして煩瑣の感も免れないのだが、やはりもう一度洗い直す値打ちはあるように思われる。まず話者の場合、「コンブレ」ではのかな憧れ(14)ではじまつたジルベルトへの愛は、「スワンの愛」を挿んで『花咲く少女たち』の第一部の前景を成し、その失恋の傷手をかかえてやってきたバルベックでは、アルベルチヌ、アンドレ、ジゼールなど一三人の少女たちへの欲望に悩む姿が描かれる。こうして知りあつたアルベルチヌとは曲折を経て同棲するだろう。その同棲生活の描写が『囚われの女』のほぼ全体を構成し、『消えたアルベルチヌ』は彼女の出走と死に伴う話者の悲しみと苦悩に大部分が割かれている。⁽⁵⁾彼の恋愛が中心にならない巻といえば最後の『見出された時』ぐらいではないだろうか。ゲルマント公爵夫人はその後社交界での母親的な庇護者になつてしまふが、『ゲルマント家の方』の冒頭では、彼女への愛のために(「私はゲルマント夫人を心底愛していた」(II.67))、姿を一目見ようと毎朝路上で待伏せするほどだった。オペラ座での『フェードル』の観劇もそのための口実だったし、ドン・シェールの駐屯地にサン・ルーをわざわざ

訪ねるのも、友情を利用して公爵夫人に紹介してもらおうという下心からであった〔III. 67-70〕。なお草稿では彼女はれっきとした彼の愛人になっている。パリの大叔父の家で会ったバラ色の貴夫人ことオデットとの交際も、この年下の崇拜者の愛の遍歴を彩っているように思われる。しかし以上の名前は主要なものではあるが、彼のリストを満たすことからは程遠いことを知っておかねばならない。町や森や海辺で、暇さえあれば彼の胸はたえず未知の少女たちへの憧憬と欲望で動悸を打っているといっても過言ではない。ルーサンヴィルの森をさまようのも百姓の娘を恋いもめてであり、バルベックへ行く途中でも汽車から大柄な牛乳売りの娘を見かけて幸福への期待に胸をときめかせ〔II. 655-657〕、バルベックでヴィルパリジ夫人の馬車に同乗して付近を散歩する時も、すれ違う美少女たちに欲望をそそられる〔I. 713〕。彼女たちの魅力は二度と会わないかもしれないことから来ると分析した後、以前パリで夜中「見知らぬ女を追いかけた」〔I. 713〕ことがあったが途中で見失ったと大明ける。そのすぐ後に背が高く美しい漁師の娘を見て親しくなることを夢見る。アルベルチヌとラスプリエール荘に向かう汽車の中では、途中から乗った美貌の少女の真白な肌、黒い眼、すらりとした身体つきから目が離せなくなる〔II. 883〕。彼女と同棲中にさえ、通りを行き交う牛乳やパンを配達する小娘たちに心をひかれ〔III. 138-140〕、口実をもうけて部屋に呼びいれたりする〔III. 141-144〕。彼女の失踪後、貧しく善良そうな娘をやはり部屋に連れこんだ後、五〇〇フランを渡して帰らせるのだが〔III. 432〕、後に両親に訴えられて警察に呼びだされる〔III. 443-44〕。アルベルチヌが死んだ後は、彼女への愛がさめたせいなのか〔III. 554〕、あるいはその思い出に生きる一方法としてなのか〔III. 557〕、街で少女たち（おそらくこれは娼婦）を拾って帰ったり〔III. 556〕、一部屋を借りて少女を囲い、夜は一緒に眠り昼もつねに傍らにはべらせておく〔III. 676〕。そんなある日、前に跡をつけたことのあるブロードの少女が意味ありげな視線を送るので門番に名前をきくと、どうやらサンルーから聞かされていた、名門貴

族の出で売春宿で身をまかせるといふ当の女らしいと思ひあたる〔III. 562-3〕。もっともこれは見当違いで、彼女はフォルシュヴィル嬢、実はかつてのジルベルトであると判明するのだが。母親とヴェニスに行けば、町を歩いてマツチ作り、首飾りに糸を通す女、ガラス細工や刺繍の女工たちとさまざまな女たちに心を奪われる。そういえばヴェニスに行く理由の一つは、ピエトビュス夫人が小間使いを連れてそこに出かけると聞いたからである。もっとも草稿段階ではもっと重要な存在⁽⁷⁾だったこの小間使いも次第に影がうすくなり、それと共に、話者のヴェニス行きの動機も曖昧になり、「私がバルベックに戻ったのもこの女性〔小間使い〕のためではなかったか？ つい最近もヴェニスに行きたくなったのだ（……）」とその点は尻切れとんぼに終わっている〔III. 474〕。ただし話者が母とヴェニスを立つ日に一人出発を延期するといひだすのは、彼女の間近な到着を知って、彼女とすごす「肉体的快楽の数刻」を逸すまいとしてである。彼女のことは、サン＝ルルーから売春宿に出入りするジョルジョーネ風の美女と聞いて以来欲望を刺激されているのだが、今述べたように二度目のバルベック行きも彼女に会えるという見込があったからである〔II. 754〕。なお彼女は実はコンブレのテオドルの妹で、かつてなぜか少年時代の話者に欲望を掻きたてていたルーサンヴィルの塔の下で暗がり、兄と少年少女たちを集め怪しげな遊びに耽っていたことを仲間の一人だったジルベルトから後に聞かされる。最初のバルベックの滞在で見かけたステルマリア嬢も彼のエロスの生活で重要な役割をはたしている〔I. 688-690〕。のちに離婚したと聞いた話者は、是非愛人にしようと夕食に招待する約束を一旦は取りつけるだろう〔II. 382-385〕。

思いつくままに、話者を翻弄する少女への夢のあとを追ってみたが、これだけでもまだ全てを尽くしているわけではない。そこには終始女性を求めてやまない、異様ともいえる恋愛者の姿がいやおうなく浮上してくるように思われる。漁色者といってもよい。少なくとも、『ジャン・サントウイユ』において夜毎通りの女たちを誘惑しよう

とつけ狙うダルトツツイ⁽⁸⁾以来のドンジュアニスムの系譜に連なる資格は充分に有している。

話者だけではない。男色者のシャルリュスもその一人である。彼は、ジュピアンやモレルとの関係は改めて述べるまでもないが、他にエメ [II. 991-3]、市電の車掌 [II. 610]、とりわけ貴族の召使いたち [II. 986-8]、そしておそらくは話者にも次々に誘惑の手をのぼす、あくことなき愛の求道者なのである。⁽⁹⁾『見出される時』で登場する時は、病氣や失意、老齡のために面変わりするほどのていたらくなのにその漁色ぶりは衰えるどころか、どうやら町を物色中に出くわしたらしい話者に、ルーアンにいるフランスの兵隊もいいがドイツの兵隊はそれをしのぐと品定めを披露して面目躍如たるところを見せる。戦争中はジュピアンにソドムの売春宿を経営させ、荒くれ男たちに釘を植えた鞭で裸身を打たせたり、若者のハレムに囲まれたりして悦にいる。話者がそれから数年後に会った時は、卒中の発作に襲われて背はまがり視力を失ってさすがに老殘の落魄たるさまをさらすのだが、こと色恋に關してはまだ健在で、先日もちよつと目を離れた隙にどこかの少年（彼の好む成人は戦争で払底してやむなくレパートリーを拡大したという）をかき口説いて一儀に及んだと昔の愛人ジュピアンも愚痴をこぼすほどである。もつともその点では、実は話者も一歩も引けはとらない豪の者であることを申しそえておこう。彼の女性遍歴の最後を飾るのが、ゲルマント大公夫人のマチネに足を運んだ彼は、厚化粧でもしたように老いさらばえた旧知の面々に出くわして自分の老いをいやおうなく思い知らされる。それも機縁となつて残り短い人生を小説に捧げよう、社交は慎もうと決意するのだが、その傍ら、「花咲く少女たちとの軽い恋愛」なら返つて仕事の糧にもなろうかと思ひ、今はサン＝ルー夫人となつたジルベルトに「ごく若い娘」を紹介するようにと取持ち役を依頼しているのである。このマチネで彼女が話者に娘のサン＝ルー嬢を紹介するのも、実はそれに応じての図らいであつた。

サン＝ルーにとつても愛はその生に高い比重を占めており、愛人ラシエルとのたえざる不和、ジルベルトとの必

ずしもうまく行かない夫婦関係は、彼もまた話者と同じ苦悩を抱いていたことを暗示する。そしてこの男女の葛藤に倦みはてたかのように、後にソドムに傾いてモレルと関係したり、ジュビアン^{〔16〕}のソドムの宿にもひそかに出入りする。そういえば彼が話者に対してビュドビュス夫人の小間使い、ステルマリア嬢、さる貴族の令嬢などの取持ち役を演じたりするのも、もはや自分では女性に嫌気がさしているからで、話者が逃げだしたアルベルチヌを呼びもどす使者に彼をたてるのもそこを買ってのことだったのかもしれない。

だがドンジュアニスムといえ、なんといつてもスワンの名を逸することはできない。オデットに振廻される不幸な愛人というイメージが強すぎて忘れられがちなのだが、彼は『スワンの愛』ではまず、次々に新しい愛を求め征服する真正正銘のドン・ジュアンの風貌で登場してくるのである。「彼はあまりにも女たちを愛していた」〔16〕から、彼からみると知合いのサン＝ジェルマン＝デブレの大貴族の令夫人たちも、愛人の眼に自分の威光を高める小道具、あるいは美貌に目をつけておいた田舎貴族などの娘を口説こうとそのあまりばつとしない交際圈に入りこむ通行手形ぐらいの値打ちしか持たないだろう〔191-194〕。旅先でこれまでにない美しさの女に出くわして、その女を自分のものにしないことは、まるで「人生の卑劣な放棄、新たな幸福のこっけいな断念」〔192〕だと考えるような人物なのである。彼の友人、知人は時折彼から紹介状を依頼する「外交的手腕にたけた」手紙を受けとったものだが、もちろんそれもみな女性追求の手蔓を得ようとしてである。話者の祖母の遠縁の男は、スワンがほとんど毎日のように夕食に通ってくるようになったので大いに気をよくしていたところ、ある日連絡もなく姿を見せなくなる。病気だろうかと心配していると台所で料理女の家計簿から、訳あってこの地を去らねばならない旨のスワンの別れの手紙が見つかり、実は毎晩の精勤も彼女と密会する口実であったことが発覚する。しかも情婦との縁が切れれば主人の方には一片のあいさつも無用と考えていたわけである〔193-4〕。そういう彼の女癖

は有名で、彼がオデットに紹介されたのもそこをよく心得た友人の取持ちによるものであり、だからスワンにとつてはこの愛も幾つかある内の一つ（“*Un amour de Swann*”）にすぎないはずだったし、最初の頃は他に熱をあげている少女とも平行して交際していた。彼がソナタの小楽節に対して感じた「未知の愛」も、そのドンジュアニスムの延長上に位置する経験なのである。

これら男性の主要登場人物が真摯ともいふべき愛の追求者である以上、配される女性たちが専ら愛の相において描かれるのも当然のなりゆきだといえよう。山査子の生垣の向うに現われた清純な少女ジルベルトは、あのルーサ・ヴィルの塔の暗がりの常連であつたし、長じてはゴモラのバイブルともいふべき『金色の眼の女』の愛読者となり、女の監視に失敗した話者にそれは女によつてならば可能だと主張する。女優のレアやアルベルチヌともゴモラのつながりがあり、サン＝ルーとの結婚後も夫を愛しながらアンドレと深い関係を結ぶ。バラ色の夫人オデットがエロスの存在であることは今更いうまでもないだろうが、ブレオーテやエルスチールなど「無数の男たちの情婦」〔I: 356〕であつたらしいばかりか、とりわけヴェルデュラン夫人をはじめとする多くの女性たちとの恋愛でスワンを苦しめ、彼の死後はフォルシユヴィルと再婚し、さらにはゲルマント公爵の情婦になるものの、ひとり衰えぬ若さを保ちつづけ他にも何人か男がいるらしい〔III: 1015-1020〕。女優のラシエルはサン＝ルーの愛人になるずっと以前売春宿で働いていたし、後にはオクターヴという青年と同棲する。アルベルチヌとなると老シャルリュスの向うを張る、あるいは彼を上廻るような女漁色家であつて、話者が少しでも眼を離すと他の女に触手をのばそうとし（例えばバルベックでのブロックの妹や従妹への色眼、I: 803-6）、その結果自宅に監禁同様に住まわせるのだが、話者の長年の念願であるヴェニス行きが彼女の生前実現できなかったのも、その少女たちと関係を結びはしないかという怖れからであつた〔III: 474〕。実際彼女の死後身元調査をしてみると、トゥレーヌの洗濯娘〔III:

524-5]をはじめとしてそうしたゴモラの女漁りの行状がぞくぞくと露見し、モレルと組んで彼が蕩しこんだ漁師の娘などを廻してもらって自分の欲望の餌食にしていたらしいことも明らかになる [III. 599-600]。なおこのモレルは、シャルリュスの他にゲルマント大公 [II. 1078-] とも関係し、サンルーの囲い者になる [III. 678] 一方でアルベルチヌ [III. 599-600]、レア [III. 214-6] といったゴモラの女とも情交があったらしい両性具有的人物なのであるが、その彼がヴァイオリニストとして七重奏曲を演奏しあの〈小楽節Ⅱ女性Ⅱ霊〉を呼びだしたのは偶然であつたらうか。

それはともかく、ブレのいうように「ブルーストの登場人物はすべて愛の浮浪者^{ヴァガボン}」であり、「快楽を予期することができるだけ早く享受することに性急かつ頑なに拘泥する」¹⁰。彼らは恋愛小説に登場する恋人たちとは全く違った、愛にとり憑かれた「半狂人」¹¹であり、愛とは人生の関心事のひとつといった悠長な問題ではなくなっている。とりわけ話者の場合は、愛を通してはじめて他のすべてが受容されてその世界をつくりあげているようにさえ思われる。少年時代の二つの散歩道は、一方はジルベルト、オデット、花咲く少女たち、そしてアルベルチヌへ、他方はゲルマント夫人、ピュトビュス夫人の小間使いへとつながる女性追求の道程でもあつて、この二方向は最後に老いたる話者がお求めてやまない若さを体現するサンルー嬢において一つに結びあわされるだろう。彼が社交界に入りするのもゲルマント夫人への愛がきっかけであり、バルベックに戻りヴェニスに行こうとするのも、またドンシェールに赴くのも愛のひそかなもくろみがあつたからである。芸術も例外ではない。ジルベルトにはほのかな憧れを抱いていたものの、彼女がベルゴットと友人であると聞いてからはそのイメージはとみに光彩を増し、こうして最初はベルゴットゆえに「ジルベルトを愛したのだが（……）、今や私が彼を愛するのはジルベルトとの関係のためだった」[I. 410]と後には逆転して愛が芸術に対して優位に立つのである。エルスチールもアルベルチヌ

への愛に一役買っている。話者は画家のアトリエを訪問した時彼女に紹介されなかったのを残念がるが、しかし二人の交際が始まるのは結局画家の催した社交的集いにおいてである〔I. 870-872〕。ヴァントウイユの音楽はスワンとオデットを結びつける「二人の愛の国家」〔I. 128〕であったし、話者のアルベルチヌへの愛に内面から深く関わることは、すでに述べてきたしこれから考察の対象になるだろう。というよりそれは本論のテーマに直結することがらなのだ。したがって話者の運命を左右した、あるいは彼の感情、行動を支配した力を『失われた時』において唯ひとつだけあげるとすれば、それは愛以外にはないだろう。愛が彼の歩みを導いていたといえるのではないだろうか。

愛は登場人物ばかりではなく、テキストの言語のレベルでもさまざまな性的幻影の透かし模様となって現われている。テオドール兄妹が案内する教会の地下には、ジギベルトの孫娘の墓があるが、フランク王妃殺害の晩水晶のランプが落ちて墓石に突きささった（「ランプはその石に自分を柔らかく受け入れさせた」〔I. 98〕）という伝説や、マドレーヌ菓子の「肉厚で官能的な」貝の肉身のかたち〔I. 42〕、アルベルチヌが「残酷な陶醉」に浸って賞味するアイスクリームの描写〔II. 129-131〕、マリアの祭壇の山査子〔I. 112-114〕など随所にエロスの欲望の陰影が表面的意味作用に粉れつつ刻みこまれている。

『スワンの愛』という内容を直截に表現した巻題に着目すれば、部分と全体との中心紋的照応関係において『失われた時』に〈話者の愛〉という総題をつけることも可能だったろう。またヴァントウイユの〈小楽節〉は、愛のみが「表現される値打ちがある」〔I. 349〕と語っていたが、『失われた時』はその忠実な実践というべきものであったのではないか。いずれにしても愛は登場人物の生のうちに、あるいはテキストの幻影として、全体に網の目を隈なくひろげた統一的テーマを構成しているように思われるのだ。ブレはそれを「異常で圧倒的で（……）不安な強

「迫観念」⁽¹³⁾と規定していたが、あるいは話者がワグナーの『トリスタン』に認めた thèmes insistants et fugaces に近いのではないだろうか。この主題は「姿を消すかと思うとすぐ舞い戻り（……）、漠然とはしているが性急で切迫し内にこもり、体質的で内臓的で、まるでモチーフの反覆というより神経痛の発作」(III. 159)を思わせたというのである。

にも拘わらず愛はそれにふさわしい扱いを受けていない。そしてその理由はすでに述べたように、話者の歩みを作家への修業の過程として捉える審美的解釈の枠内では、愛は文学・芸術によって後者の勝利とともに否定される以上、副次的な位置しか見出すことができなかったからである。その解釈が全く誤りというのではないが、それは余りにも性急に適用されて、愛の否定についてそれがどういうレベルでなのかを考える余地を残さなかった、愛と文学とのより重要な関係に目を向けるのを妨げた。愛の否定のうえに文学が成立したのではない。両者の関係はおそらく不可分のもので、もっと肯定的、積極的なのである。といってもそれは、〈小楽節〉の「そのみが表現されるに値する」という考えが仄めかす、愛がたんに題材として使用されるという意味でも、また愛による苦悩の文学的効用 (III. 904-7) や苦悩礼賛 (III. 909) から想像しがちな文学の外的補助というのでもなく、もっと直接に話者の愛そのもののなかに、文学への道すじが用意されているという関係においてなのである。

だがその前に、話者をはじめとする登場人物たちの不安と苦悩に彩られたほとんど狂躁的な、あるいは「内臓的な」女性追求はどうしてそうなのか、いいかえれば話者の愛の「特殊性」とは何なのかを解さばぐさねばならない。それを通して「文学者としての修業」 *apprentissage d'homme de lettres* (III. 907) が、愛に書きこまれた文学への道すじが、見えてくるのである。

二 愛の起源

アルベルチーヌが死に、その記憶も消えうせた頃、タンソンヴィルにジルベルトを訪問しようとして、話者はある秘密を打明ける。パリに部屋を借りて少女を囲っているというのだ。今の彼には、その少女が夜は一緒に眠り、昼は家でも外でもそばにいてもらう必要がどうしてもあるという。なぜか？「ひとつの愛は、たとえそれが忘失されようと、次にくる愛のかたちを決定しうるからである」(III. 677)。愛するものと打ちたてた日々の習慣は「われわれの全ての愛ではないにしても、少なくともその内の幾つかの愛のかたち」を決定して、「その女性やその女性の記憶よりも長く生き残る」からだ。だからその少女も、「かつてアルベルチーヌがしたのと同じように私の生活を見た」さねばならない。常時彼のそばに付添い、その外出には見張りがつく。だから今度家をあけるについては、「女性を愛さない友人の一人に監視させることを彼女に了承してもらわねばならぬ」いだろう。となるとアルベルチーヌは、いわば彼女以後の話者の愛の起源をなしていることになる。

ましてアルベルチーヌの思い出が生々しく残っている頃には、彼の少女漁りはさらに彼女との愛を準備するかたちで行われた。彼の趣味はある種のタイプの女性のみに向けられる。アルベルチーヌと似た女性、つまり「ブチ・ブル階級の褐色の髪の女」(III. 553)に食指が動くのだ。アルベルチーヌが惹きおこしたのと同じ感情が目覚めさせられない以上、相手がどんな誇り高い公爵夫人であろうと愛は生まれてこない。だからアルベルチーヌ以降話者にとって女を愛することは「彼女への愛の思い出のよみがえり」(III. 555)なのだが、それは一方では彼女の残した「空白」(III. 556)を埋める「代理的快乐」(III. 552)でしかないともいえる。その女たちは「アルベルチーヌの思い出に連なる存在であり、私が見出そうとしているのはまさに彼女なのだ」(III. 557)。こうして彼女は死後その思い出が消える前も消えてからも、話者の愛の起源でありつづける。¹⁴彼女の愛に、「金ポウゲや山査子に、新し

く見る花以上の現実性をもたらす」コンブレの始源的体験と同じ位置を与えているのも興味ぶかい〔III. 554〕。だがアルベルチーヌは真に愛の起源でありえようか。彼女のそれは真の起源の模写にすぎないのではないだろうか。

彼女に対するのと同じ欲求がそれ以後も残って、それが次々に愛を掻きたてるとするのは、その欲求が充たされれば相手が誰でも構わないことになるが、その理屈を当のアルベルチーヌに適用することもできることに話者は気がつく。「ある人間がいなければ他の人間で間にあわせなければならぬ。私がアルベルチーヌに求めていたことを、他の女性、たとえばステルマリア嬢が与えることも可能だったろう」〔III. 556〕。ステルマリア嬢がブローニエの夕食の招待を受けいれていれば、彼女が話者の愛する女性になっていただろう〔III. 501〕。アルベルチーヌが話者の欲望を支配したのは、その都度の「欲望の充足と彼女の肉体の特殊性との間に解きほくしがたく密接に絡みあった思い出の絆ができて」、それを断ちきれなくなったからで、結局それは欲求充足のアポステリオリな習得にすぎない〔III. 501〕。彼女の「個性」は後から重要になってきたのだ。そのうえで「どの愛にも普遍が特殊と並びたつ」〔III. 904〕と話者がいうのは、ある普遍的な愛のかたちがすでにあって、その特殊な実現としてはじめてアルベルチーヌの愛も成立したということであり、「愛する者の存在もより広大な現実の中に溶解して」忘れられていくというのは、あれほど深く執着したアルベルチーヌも死ねばそれを可能にした愛のかたちに吸収されるということである。こうして共通の愛のかたちを媒介に、人はひとつの愛から別の愛へと移っていく。その普遍的性格のおかげで「次にくる愛はこれまでの愛を敷き写しにする」のである〔III. 908〕。アルベルチーヌ以前に、だから愛のかたちは決定されていた。では一連の継続的な愛を貫く普遍的なもの、それはどこからやってきたのだろうか。

「欲望を他のもので満足させる」〔III. 556〕とか「代理的快乐」〔III. 552〕、「代用品」〔III. 908〕としばしば語るのは、代用でない真の欲望の対象がかつて存在したということである。だが話者はその点になるとどうも言葉を

濁そうとする。アルベルチーヌの死後他の女たちに要求する「種々の日常的習慣は、その前の愛の中において、すでに存在していた」と認めるものの、「ただわれわれにはその起源が自分では思い出せないのだ」と逃げる〔III. 97〕。アルベルチーヌの向こうの思い出せない起源とは、いわゆる初恋の相手である〔922〕ジルベルトのことだろうか？ たしかに「ジルベルトの官能的で勝気な人格はアルベルチーヌの肉体の中に移住し」、両者は少女の違いをこえて「深い類似」があるように思われ〔III. 502〕、後になっても「アルベルチーヌへの私の愛は、ジルベルトへの愛のなかにすでに書きこまれていた」〔III. 904〕と語るだろう。だがそれにも拘わらずジルベルトは、たえず一緒にいるという習慣を話者との間に持たなかった以上、それをアルベルチーヌに継承させた女性ではありえない。実際、アルベルチーヌからバルベックのホテルに一人で泊まるから一緒に楽しい夕べをすごさないかと誘いを受けた時、話者の心をかすめるのは「ジルベルトを愛していた頃よりも、ずっと遠い時代」のことなのである〔931〕。「一緒に晩をすごす」〔ibid.〕習慣をつけた女性がそれ以前に存在していたということではないだろうか。それはゲルマント夫人でもオデットでもないだろう。彼女たちの向う、起源がもはや思い出せないほどはるかな昔の日々に、今は失われた真の樂園〔III. 870〕があって、その間欠的な記憶のよみがえりが話者の愛を成立させていたのではないか。そういえば作品冒頭のいわば見取り図を提示したとも思われる箇所、エデンの園でアダムからエヴァが誕生するように一人の女が夢みる話者の腿から出現し、彼女との抱擁のうちに目がさめた彼の頬はまだその接吻の火照りが残っているという〔I. 5〕。この女性は何者なのだろうか？ というのも、時として「彼女は私がこの世で実際に知っていたある女性に面立ちが似て」いるからである。そういう場合話者は、「彼女と再会するという目的に全霊を傾けよう」と思うが、目覚めると記憶が薄れてこの「夢の少女」la fille de mon rêve の存在を忘れてしまう〔ibid.〕。しかし結局彼の人生は、この夢の少女をひたすら追い求めることに尽きていたのではないか。

なお、話者は自分の身体から彼女が生まれたのであって、彼女、の、身体から自分が生まれたとは決していいないが、そこに夢ないしモレル流の言語の論理を解読格子として当てはめる必要はないだろうか。

初まりは「失われた時」において特権的位置をしめるのだが、にも拘わらずそれはしばしば蔽い隠される。話者のなかに蘇って他の世界から孤立して漂流する「花咲くデロス島」は、「どの国から、どの時代から、（……）どの夢から来たのか」彼には判らない〔I. 184〕。ただ「長い歲月」を横切ってきたことは確かなのだ。ユディメニルの三本の立木を眺めた時に、彼に「深い幸福感」〔I. 717〕を与えたものは何なのか？ 「よく知っているもの」なのに「漠然としか感じとれず」〔I. 718〕、祖母と湯治にでかけた時のことなのか、幼い頃に読んだ、しかし読んだことも忘れてあるある作品に関係するのか、それとも「夢の光景」なのか、結局その起源は明確にされないだろう。「今ははや余りにも遠い昔となった歲月」からやってきているらしいが、それさえ断定は避けられている。しかし他方ではひた隠しにされる起源の秘密を、もって廻った言い方というのか、虚言癖のある人間のその瞬間の用心深さとは相容れない率直さでというのか、われわれに引渡していかないわけではない。花咲くデロス島の起源を話者は正面からは隠してしまうものの、文脈を前後にずればそれがコンブレ——たんなる場所ではなくある神話的世界としての——に遡及することは明らかなのである。

コンブレが他のなものにも換えがたい重い意味を帯びるのは、それが話者の人生の始源を構成するからである。メゼグリーズとゲルマント家というコンブレの二つの散歩道は、彼の「精神的土壌の深い地層」をなし、そこで出会った人やもののみが彼に喜びを与える本当の人やものであって、「今日初めてお目にかかるような花は真の花とは思われない」〔I. 184〕。最初に知ったもののみが信じられる。二つの散歩道は話者の人生の出発点というだけではなく、その「世界の原型」⁽⁶⁾をなしている。彼のその後の体験はコンブレの延長や投影のようなものになる。では

初まりの決定的意味は女性とその愛にも通用するだろう。最初に出会った女性のみが、彼にとって本当の女性ではないのか。草稿の中でだが、「ある種の男たちにとってその最初の愛の対象となった少女は、彼女が古い死んでからでさえ、なお他の女性には持ちえない魅力、ある特殊な威光を帯びて」おり、他の女性とは「本質的な相違」があると語られていた〔新 I. 852〕。さらに「最初の愛の比類のない性格」は「持続的」persistent でもあるのだから〔新 I. 806〕、その後の愛はそれと本質的に異なる最初の愛の、追体験にすぎないのではないか。ブルーストはやはり草稿でラ・ロシュフコーを援用して、「人は生涯に一度しか愛さない」、したがって「ある女性を愛することは、最初の時は自分でも気がつかないうちに体験していた愛の不安を、われわれのなかに掻きたてる一方法でしかない」と述べる〔新 I. 643〕。愛とは、その意識さえなくそれだけに抜きさしならず生に食いこんでいた最初の愛の反覆だということだろう。しかし個人がその生活史において完全に無意識でありえるのは、まだ意識形成以前の「はるかな遠い夜」においてであろう。では話者が最初に出会い愛した女性とは、ただ一人をにおいて他に考えられないのではないか。話者はいう、ヴィヴォーヌ川より美しい水蓮の咲く川に行っても、それに沿ったゲルマント家の散歩道を見たいという彼の気持は満足させられない、それと同様に「のちに愛のなかに移りすみ、それとは切離せないものとなるあの不安」が頭をもたげても、それを鎮めようと「私の母よりもっと美しくもっと聡明な母親に、おやすみを言いにきてもらいたいなどとは思わなかったらう」〔I. 186〕。たしかに母親の向うにまで遡りうる女性も存在しない。始源の女としての母が、話者にとって女性の原型であり、理念ないし幻影となつて彼の愛につきまといつていたのではないだろうか。なおこの引用した一節が不安と愛を結びつけ母と愛人を比較することで、いわば母への子の愛という聖域が取払われていることに注意しておきたい。トリスタンのように、あるいはそれ以上に、母と愛する女性とがここでは重なりあっている。すでに指摘したように、母がおやすみの接吻をしてくれない晩に

陥る話者の不安は、オデットに対するスワンの愛の不安と似ており〔30〕、あるいは逆に、オデットと一緒に帰れなかった夜スワンは、「数年後彼がコンブレの家に夕食にくる晩に私自身そうなるように、不安の内に床に就く」だろう〔I. 297〕。話者の愛に即して一例を挙げれば、「母のおやすみ」を待つ間に感じた彼の不安が、「いつの日か私の母ではなく（……）、一人の少女のために蘇ってくるなど」と一体誰が考えたのだろうか〔III. 501〕。

こうして話者の異常ともいえる絶えざる愛の追求の出发点に、母親の存在があったことを認めることができる。

彼女は『失われた時』の始源であるコンブレに対応する女性であるが、しかしおそらくはそのコンブレのさらに向うにまで遡及する、作品全体の太母的な存在であったのかもしれない。コンブレは『失われた時』の核になると同時に、後者のマクロ・コスモスを閉じるサン＝ル＝嬢の存在がコンブレの二つの散歩道の結合である以上、それを——少なくとも萌芽的に——内部に封じこめてもいるだろう。ではコンブレはどのように「形成され」たのだろうか。

「コンブレとその周辺は（……）私の一杯のお茶から出現した」〔I. 48〕。その紅茶を勧めたのは、寒がっている息子を暖めようとした母親だった。ここにある伝統的な図像を透かし見ることができるよう思われる。母親と一杯の紅茶の構図には、しばしば女性と泉の取合わせという図柄によって象徴的に表現される、豊穣の女神とそれを祀る泉という古い信仰の記憶が湛えられているのではないだろうか。泉は図像学的変遷を経て、時には甕入りの水というかたちでも表わされる。一杯の紅茶は、この古い再生信仰との関連で、それ自身『失われた時』を内に抱えこむコンブレを生み出す母胎となっていたように思われる。この場合、母の女神は紅茶を勧める女性であると同時に、愛と食欲を一体化したマドレーヌ菓子として象徴的に紅茶とともに摂取されるかたちでも存在している。紅茶の豊穣力は、たしかにマドレーヌ菓子が生かすことによって威力を発揮している。コンブレの蘇りに先立つ「甘美な快楽」はその混じりあいから生じているのだが、この菓子の描写は大文字のマドレーヌつまりマグダ

ラのマリアさながら「敬虔」であると同時に「官能的な」襲の入った貝の肉身のかたちをしていたと、かなり露骨に女性の性器を暗示している。そのうえ、この菓子に混じった紅茶を一啜りした話者は、この世の味気なさをたちまち忘れてしまうのだが、その具合は「愛の作用と同じ」だと語られているのだ（「45」）。おそらくコンブレ Combray は *con vrai*（真の母胎）でもあるが、さらにそれをも生みだした起源の起源ともいべき母の存在がその背後にあつて、彼女の幻影が作品全体に君臨しているのではないだろうか。

いずれにしても、話者の愛は起源としての母から逃れられないだろう。彼女との関係はその後の愛を決定し、愛を愛として同定するための範型となるだろう。話者は、母との関係は他の愛人によつては到達しえない心の鎮静をもたらしたと述懐するが、それはいいかえれば彼のその後の愛の追求はこの無意識裡に習得した始源的愛の再現もしくは追体験をめざすことであり、そうである以上、つまりこの愛が絶対化されている以上彼の目的は結局は——後述するあの例外的瞬間を除けば——充分に実現されえないだろうことを予め告げている。話者を始めとして他の登場人物にも不安にかられた焦燥的ドンジュアニスムが認められたが、おそらくドン・ジュアンとはこの絶対的過去、つまり「我がものにしたいと熱望する近づきがたい母」を志向する者（ジャン・ジュヴ）のことなのである。失われた母の愛という幻影が、挫折に行きつくしかない不可能な愛の探求へと駆りたて、まさに不可能だからこそこの探求は憑かれたようにやむ時もなく遂行される。しばしばブルーストにおいて愛ないし嫉妬は『嫉妬の終わり』（『楽しみと日々』）のオノレ以来、死（忘却も含めて）によつて終止符を打たれていた。（小楽節）がスワンに愛の虚しさを語り諦めを説くのも、この不可能性の認識をふまえてのことであるように思われる。だが本当にこの始源的愛を成就する手段はないのだろうか、それは秘かに話者に課された問となつて彼を文学へと導くだろう。

三 夜愛する者を傍らに……

話者の愛が母への始源的な愛をつぎつぎに「代理品」としての女性たちに求めていくことであるなら、逆にその一連の愛は母子相姦の影をつねに背負っているといえる。とはいえそこには、この言葉が喚起するような禍々しい気配——『オイディプス』や『フェードル』のような——は必ずしも強く感じとれない。それはひとつには禁忌を成立させる〈父〉が、コンブレの夜以後は殆ど登場しないことにもよるが、それと同時に彼の母への愛が子としてのものにとどまっているからでもある。子であるにも拘わらずではなく、子であるために母を愛する、そういう幼児の状態の継続が彼の願望なのだ。しいていえば、母に女性を求めるのではなく、女性に母を求めるからである。

『ジャン・サントウイユ』のダルトツツイが夜毎破廉恥に女を追ひ求める理由として、「孤独への恐れ」があげられていることに注目しなければならない。彼は「家に帰る時間が来ると、一人で帰るのがいやで」外でぐづぐづしたり女を探したりするのだ(846)。いわゆる性的欲望が、彼を女性に向かわせているのではない。あるいは彼にとつて欲望とはそういうものだった。夜一人ですごす孤独の恐怖を逃れさせるなにかなのだ。この女性欲求の動機は『失われた時』において、とりわけ母やアルベルチヌとの関係において一層明瞭になる。ここで愛に関して目立って使用される言葉といえは、まず不安、苦惱、悲しみを表わす *angoisse*, *anxiété*, *inquiétude*, *douleur*, *souffrance*, *tristesse* などかと思ふが、それに対応する表現としてはたがって官能的喜びというよりは逆に鎮静を表わす *apaisement*, *calme*, *paix*, *seizei*, *douceur* 系統の語の使用が圧倒的に多いという印象をうける。ここに彼の愛の特殊性がすでに示唆されている。彼の愛が苦悩の鎮静、不安の安らぎを求めることは、子の母への幼児的欲求の当然の帰結として考えられるからである。

アルベルチヌへの愛を検討すると、彼女を母の継承者ないしもう一人の母として描くかなり直接的な表現が意

外に多く見られる。たとえばバリの家で彼女の訪問を待ちこがれる話者は、「ますます募る不安な欲望」に責められる。そこへようやく彼女から電話——この場面は『トリスタン』の一場面に比較された——で、『フェードル』を観ていて遅くなったので訪問は明日以後に延期したいといってくるのだが、彼は一晚無駄に待たせたのだから「せめて安らぎ (paix) ぐらい与えて欲しい」と口実をもうけて、すぐに来させようとする (II. 732)。この安らぎは彼女の接吻によってもたらされる (II. 738) のだが、ここにコンプレの夜と同じ構図 (中々来ない愛する者を待つ不安、接吻によってもたらされる安らぎ) を認めることは困難ではない。実際話者は「この誰かにいてもらいたいという激しい欲求、それを私はコンプレで母との関係のうちに身につけてしまった」と告白している (II. 733)。二度目のバルベック滞在でも、アルベルチーヌのやさしく従順な様子を見ると、つい抱擁したくなってしまふのだが、そうすれば感じるだろう「快楽の種類」はかつて「母を抱擁した時に覚えたもの」と同じだといわれる (II. 831)。

『囚われの女』において、やはりアルベルチーヌの接吻は母が「コンプレのはるかな夜」に与えたものの以来、「ついで経験したことのないような安らぎ (apaisement) の力」を持っていたし (III. 77)、話者が彼女に話しかける調子も「コンプレの少年時代の私が母に話しかける」時のそれに似てしまうという (III. 79)。

アルベルチーヌは単に話者の母に似ているというだけではなく、げんに母として存在しなければならぬ。この恋人たちの母子的関係も随所に暗示されている。二人の愛を語るのにしばしば「家族的な (familial)」という一見不可解な形容詞が混入しているのもその観点から解釈できるだろう。トロカデロに出かけたアルベルチーヌが女優のレアと会わずに帰宅すると知った話者が覚える安心感 *la douceur familiale et domestique* (III. 485) だと表現されるが、この二つの形容詞はいずれも通常は家族的なという意味である。同棲中の二人が一種の夫婦であることに注意を促す一節がその後に続くが、子供の存在を含意するはずのこの語がそれだけの意味で選ばれているとは思

えない。その先でアルベルチヌを「私の妹、私の娘、私のいとしい愛人」[III. 498]とも呼んでいるのは、*famille*の解釈を文字通り家族間の愛にかかわるものへと導く手掛かりを与える。しかし話者がすでに彼女を、「同時に愛人として、姉妹として、娘として、そしてその毎日のおやすみに対して私が幼児的な欲求 (*desoin puéril*) を感じはじめてきた一人の母親として」[III. 111-2] 位置づけているのは、前の引用では欠落した重要な指示を補うもののように思われる。つまり母と子の愛が婉曲に *familial* という表現にこめられているのではないか。愛人の妹や娘としての位置づけは、それはそれで言葉通りに受取ってよいとしても、しかしある意味では禁忌を憚った母の隣接的表現という面もあるのではないか。コンブレの冒頭で少年時代の話者が母への愛ゆえに覚えた不安は、以後それを投入する決まった目標もなく、「ある時は子としての愛情 (*tendresse filiale*) に、ある時は友達への友情に」⁽²¹⁾ 入りこむという。それは子としての愛が、母以外のしかし母的な女性に向けられるということだろう。いずれにしても、後年のアルベルチヌへの愛が *tendresse (...) filiale* [III. 79] というこれと同じ言葉で表現されることを付けくわえておこう。

こうしてアルベルチヌへの愛はかつての母体験の再現であり反覆となる。たしかに囚われの女との生活にはあちこちにコンブレの母への愛が蘇えり、それと同じ苦悩と安らぎが色濃くにじみでている。コンブレの少年は、毎晩就寝の時間が近づくとも母親がおやすみの接吻をしてくれるだろうかと激しい不安に苛まれる。「私はぶるぶる震えて、母の顔を不安な目差しで見守る」[II. 183]。スワンが夕食に招待された晩、とうとう少年は母に接吻しないで寝室に行くように父に命じられる。こうして「臨終の聖体拝領も受けずに」二階に上った少年は、ベッドという墓穴を掘り、パジャマという屍衣を着るのだが、「一種特殊な悲しみ」に耐えきれず「受刑者の策略」を用いて母に手紙を書いて寝室に呼びよせようとする。女中フランソワーズが信奉する「絶対的な掟」の網の目をかいくぐつ

て、どうか「禁じられた食堂」にいる母に手紙を渡させるものの、母の返事は無く、上ってこようともしない。しかし手紙を書くことで「もう一度母に会える瞬間」(le moment de la revoir, I. 32) が身近になったためか、「彼女に会わずに眠れる可能性」がなくなったと感じた話者は、この不安と苦悩に耐えるよりは是非とももう一度会って接吻してから眠ろうと決意する。すると「私の不安は消え、ある至福感が私のうちに拡がる」(I. 32)。こんな決意も彼の家庭では「きわめて由々しい事態」を招きかねないのだが、それによる「厳格な処罰」は覚悟のうえで、少年は起きたまま、やがてスワンを帰して先に一人で二階に上ってくる母を廊下で待ちぶせる。とつくに寝ているはずのそんな息子の姿に驚いた母親は、夫がくる前に部屋に行かせようとするが、時おそく父はそこに来合わせる。万事休すと思った瞬間、意外にも「私は何も欲しくない……」という父の気紛れな裁量により、その晩少年は母と一緒に過ごすことになる。母の厳格な「原則」をまげたことは、取返しのつかないことをしたという悔恨の念を与えもするが〔I. 38-39〕、それも収まって、母の『フランソワ・ル・シャンピ』の朗読をききながら、彼は夜母を自分の傍におく甘美な (la douceur de la nuit où j'avais ma mère auprès de moi, I. 43) に心おきなく身を委ねるのだ。コンプレの就寝劇を次のように、〈毎夕のおやすみの接吻への欲求——与えられない不安——それを得るための策略——母の拒否——父による禁忌の除去——母の意志を曲げた悔恨——母と夜を過ごす喜び〉と分節化すれば、その内禁忌の除去と悔恨を除外すれば、この体験はアルベルチヌとの関係においておおむね再現されている。話者は「午後の終りになる」と、あるいは「夜になって私の不安が戻ってくる」と、「アルベルチヌの存在に(……)安らぎを見出そう」とする〔III. 87, III. 367〕。この夜の不安、そして彼女を「自分のそばに毎晩おいておきたいという欲求」(le besoin que j'avais de garder ainsi tous les soirs Albertine auprès de moi, III. 77) は、まさに母に対して感じたことの延長上にある。彼女がベッドに腰かけて彼に与える接吻の安らぎは、かつて母が「コンプレの

はるかな夜」に「私のベッドにかがみこんで」接吻した時の安らぎに匹敵するといわれていた。安らぎがもたらさない夜があるのも同じである。アルベルチーナが他の誰か（女性）との快楽のもくろみを秘かに立てている場合、その去り際の接吻は「いつもの接吻とは違ったものになり、かつて母が怒っていた（……）日の接吻がそうだったように、私の心を鎮めてはくれない」（III. 87）。彼女のゴモラの関係を仄めかして不興を買った夜も、その接吻は安らぎどころか、「子供の頃の不安」（III. 112）を掻きたててしまう。しかし、母にならいえた心のこもった接吻への催促もアルベルチーナにはいい出せないとそのには多少違いもあることが示されるのだが、それは返って二人の類似を浮きたたせる。もっともこの場合は、なにからなにまで同じである必要はないが、話者の感違いといわねばならない。コンブレの夜、母が家事の合間に父の顔色をうかがって寝室の少年に与えにくる接吻は、あつという間に終って、はや立ち去ろうと戸を開ける母にほぼ話者はもう一度接吻を頼みたいと思うのだが、それはすでにぎりぎりの譲歩をしている母を怒らせるだけだと思っただけでいい出せないでいたのだ（II. 13）。アルベルチーナが寝室から立ち去ろうとするのを、「呼びとめ（……）仲直りする口実」が見つからないまま不安のうちに見送る話者の姿は、この点でもコンブレの少年と重なっているわけだ。こうして彼は「かつてコンブレで母が接吻で私の心を鎮めることなく立去った時のように、彼女の背中に取縋りたい」と思うが、すでに時機を失し、その部屋の前まで行ってみるものの廊下をうろうろするだけで、結局は冷えきってベッドに戻り一晩中泣きあかす（III. 112-3）。この悲しみに耐えられないなら、彼女に接吻を「物乞いする恥ずべき習慣」がついてしまうだろう。そこで彼は「そうした晩はしばしば一計を案じ」る。彼女の眠りが深いのを利用して、眠らせてから彼女を所有するという方法もその一つである（III. 113）。しかし策略といえばフォルチュニーの服などの物品を贈っての懐柔策があったし、女性が自分の快楽（ほぼゴモラ的な）のもくろみを隠そうと常套的に嘘をつく以上、その嘘のはころびを突いて真実を

あばき、彼女を全的に所有するにはさまざまな策略に頼るしかないのである。彼はアルベルチヌの愛をかちえるために自分の本心は明かさず、本当に好きなのはたとえばアンドレであるかのように装い、返ってそのために彼女が逃亡した時も戻ってほしいと率直に申しでられず、ヨットやロールスロイスで釣ってみたい(III. 468)、アンドレと一緒に住ませると気をひくものの(III. 467-8) 効を奏さないという具合である。

四 原関係の障害

そうした策略を弄する底には、自分は愛されるはずがないという悲観的な確信が横たわっているのだが、話者によれば「愛が報いられることのない人々が存在する」(II. 835)。愛とはすなわち「*amour non partagé*」なのだという。そういう人々は、女性の善意や気紛れあるいは単に偶然から、まるで彼女が本当に自分を愛しているかのような言葉や振舞いで彼らの欲望に応えてくれる瞬間の「見せかけの幸福」だけで満足しなければならない(「ibid.」)。この悲観主義はそれにしてもどこから生まれてきたのか。話者は幼児期その始源的な女性によってよほど深く傷つけられたことがあるのではないだろうか。でなければ、後に愛に転移する母への癒しがたい不安は生まれてこなかったはずである。

人格形成における母子関係の重要性は、いい古されたようで実はまだ充分に注意を払われていないように思われる。ある心理学者によると、人は生後の一定期間、すなわち子宮外胎児期(ポルトマン)というべき段階において母子一体の関係が成立し、この時期に子が母と一体化する楽園を十分に味わえないと、その後の人格形成に神経症などのかたちで悪影響がでてくる。これを原関係の障害と呼ぶ(M・ヤコービ²³)。母親は子に食べものを与え自分の身体や衣服で包みこむ保護者であるばかりか、それ自身世界そのものとして立ち現われるので、彼女が自分にほ

ば絶対的に依存している子の欲求に適確に応じてやらないと、子にとってそれは世界そのものである母によるいけば救いのない拒絶として了解されざるをえない。こうした原関係の障害を蒙った幼児は一般に、自信に欠け消極的で不安で疑りぶかく嫉妬しやすいうえに、攻撃的で罪悪感の強い人間に育つといわれる。人間の自立的成長の遅さがこの傾向に拍車をかける。たしかに人間は動物のなかで最も自立に時間のかかる存在であり、普通の動物なら自分の足で立って歩くのに一年もかけていたらたちまち他の動物の餌食になってしまうだろう。さらに動物の捕食行動にあたる経済的自立は大体十数年から二〇年前後の長い学習期間を必要とするのだが、これも普通なら飢え死にに追いこまれること必定である。この両親への依存の強さが人間における母子関係の影響を深刻にしている。

子にとって母親とは、まず自分の生物学的維持に必要不可欠な存在であり、その不在はたちまち子の死に結びつきかねない。すると母不在の不安とは生存本能に基づく死の不安であって話者が眠る力を得ようと、昏で母の頬から「彼女の真の現存^{プレゼンス}を汲みとろう」とするもの（「13」、折悪しく母の接吻をもらえないで二階の寝室に入って彼が屍衣のパジャマを着て墓穴のベットの横たわるもの（「28」、また「アルベルチヌの現存」に眠りに必要な安らぎを求め（「III.89」、しかし折角の接吻も「そこに彼女自身が不在である」なら（「III.112」、不安に陥ってしまうのも、まず母親への生物学的要請がその基盤にあると考えてよいだろう。いない、いない、バァ、や隠れんぼなどの子供の遊戯は、母の存在がたちちに生死を分かつ不安にみちた子の実存を反映したものではないだろうか。といっても話者の求める安らぎは、純然たる生理学的欲求充足のみをさしているわけではない。始源の時代における生理的基盤のうえに築かれた、母への人間的信頼感を前提としており、もはや衣食だけでは充たされない母の現存への感情的欲求が問題になっていることはいうまでもない。だから彼女の現存、presence とはこの生理と感情の二重の信頼関係を支えるものとしてひとまず考えられよう。ところでこの母子関係は母による子の拒否や子自身の成長

（離乳期、成人礼）などとともに段階的に解消される。しかし子が母子一体的世界の崩壊にまだ耐えられない段階で、母の拒否が行われたりして信頼関係が損なわれると、母への欲求は子が成人に達しても充たされないうまま、部分的か全面的に固着して残存すると考えられる。プルーストの幼少年期にそうした母子関係の障害が出来たという確かな伝記的証拠を見出すのは困難であろう。しかし『失われた時』の話者がそうした心理的外傷を負った人物であることは、その不安や嫉妬、愛の悲観主義などからみてほぼ断定しうるように思われる。蛇足までに付け加えれば、彼の嫉妬は、自分の死活を左右しその現存のみが欲求充足をもたらず（母）の不在に基づく不安の別名に他ならない。スワンはある晩、頭痛で横になりたいというオデットに「カトレアする」こともなく追い返される。しかし嫉妬の疑惑に苦しんで真夜中彼女の部屋まで戻ると、案の条明りが灯り話し声が聞こえる。ところが間男の現場を抑えたと思われるこの瞬間、スワンの嫉妬の苦しみは逆に軽減されたという。それは彼がオデットの隠された「もう一つの生活を捉えた」と思ったからだ。そこで語られる「真実への情熱」や「知性の喜び」とは、結局自分を捨ててどこかに隠れて楽しんでいる母を見出そうとする情熱と、それを遂に見つけ出した喜びであり、それによって母不在の不安の方は解消されたのである。また夜会からオデットを残して一人先に帰ったスワンは、その後彼女がどこかの乱痴気パーティーで一体どんな快楽を味わっているのかとあれこれ妄想に苦しむのだが、それは彼に「性的結合などより激しい嫉妬をひきおこしたといわれている」（297）。それは嫉妬の原因が不在の母を突きとめられないことであつたからではないだろうか。

五 食べものとしての母

話者の少女趣味がしばしば洗濯娘やミルク売りの娘に傾くのは、その愛における母幻想の兆候として考えられる。

彼女たちは乳を吞ませ、服で包むという母親の機能をそれぞれに荷っているからである。アルベルチーナもそうだったが、大柄な女性への趣味は、そこに幼児を保護する力強い母の側面がそういうかたちで表象されているからなのかもしれない。それはともかく、このミルク売りの少女 (*laitière ou crémère*) への憧憬は話者の欲望の性質を示唆するものとして注目に値する。彼の欲望は、フロイトの口唇期にあたる、性欲と食欲が未分化な状態にとどまっているように思われるからである。母の現存が子の生物学的維持に関わる生理的欲求とその基盤のうえに成立した感情的欲求という二重の要請を充たすことは指摘したが、欲望の未分化は母のこの二重構造と対応しているようである。実際、少年の話者が「聖体パンとして」差し出された母の頬に唇をつけて「彼女の真の現存」を汲みとろうとする〔I. 13〕時、すなわち乳房ではなくその頬から彼女の愛を、しかし食べもの（乳）のように摂取しようとする時、二つの欲望はもはや一体をなして区別ができない。なおこの食べものとしての母の存在は改めて彼の子としての愛の性格を際立たせるものである。母は料理を作って食べものを与える存在となるその前に、子の胎内期および出生後しばらくはその身体そのものが食べものであった存在である。話者の母への欲望における頬への執着は、母が食べものでなくなった後にもそういう母のイメージをこの「ふっくらとしたバラ色」の局部〔I. 792〕が保っているからではないだろうか。したがって、母の代理となるかぎりで欲望をそそる女性たちへの関心においても、頬は特権的ではないにしてもかなり重要な位置を占めるし、それがしばしば食べもののイメージを荷うのも当然だといえよう。バルベックで出会った少女たちへの欲望は頬に接吻したいというかたちをとり〔I. 712〕、ステルマリア嬢の「青白い頬にぽつと咲きでた生きいきとして官能的なバラ色」を見て、そこに彼女のブルターニュでの「詩的生活の味 (*savate*)」を夢想する〔I. 689〕。はじめて会った頃のアルベルチーナは「艶のない頬の女」〔I. 793〕とか「豊かな頬の少女」〔I. 846〕と頬の特徴で他の少女から区別され、それがバラ色に染まるのを目撃し接吻

したいと思ひ「[I. 931]、陶醉状態にさへ陥る [I. 933]。そしてある時は「それは一体どんな匂い、どんな味、わい (savour)」がするものかと考える [I. 888]。一見単なる比喩とも思える goût や savour の背後に、話者の接吻が求めているものが暗示されている。それはその頬が「安らぎの聖体拝領のパン」[I. 13]であり「臨終の聖体拝領 (viatique)」[I. 27]であった幼少年期の母の記憶であり、さらにその彼方なる食べものとしての母の「現存」ではないだろうか。なおそれが宗教的色彩に染まっているのは、さしあたりそれだけ母との絆の深さを示すものと考えておくことにしておこう。

話者の未分化の欲望にあつては、頬と唇の方が生殖器などよりはるかに愛の器官として適切であり、母は体外に排出した子をそこを通して心理的内部へと受容し、子はそこから母の現存を摂取する。この現前というマナのような生命力の核をなしているのは、いうまでもなく母乳である。祖母はバルベックで「朝早く私にミルクを飲ませようとした」[I. 669]女性であるが、その頬はほとんど乳房のようなものとして描かれている。海辺に到着した夜、初めてのホテルの部屋で不安におびえる孫を救いに来る彼女は、「私の生命を保持し強化しようとする欲求」(desir de conservation et d'accroissement de ma propre vie)を、「私が自分で抱いているものよりはるかに強く持つて」と述べられる。これは乳児を育てる母親の姿勢ではあるまいか。いいかえれば話者は彼女との関係において一人で生きることの不可能な乳児の段階に止まっているわけである。「私は祖母の腕のなかに身を投げて、(……)唇を彼女の顔に下から吸いつかせた。このように私は彼女の頬、額に口をびったりつけると、そこからなにか慈愛にみち養分のつまったもの (quelque chose de si bienfaisant et de si nourricier) を汲みとるのだ、まるで乳を吸う幼児のように身じろぎもせず一心不乱に、しかし安らかにそれを貪るのだ」[I. 668]。

夜中に目覚めた話者が、「われわれの少年時代の頬のようにふつくらして生氣あふれる枕の美しい頬」に自分の

頬を押しつけるのも「I. 4」、そこに失われた母の「美しい頬」を見出してかつての母子一体感をたぐりよせようとしているのである。食べものとしての母幻想は、アルベルチヌとの愛のなかにも多少の変奏とともに浮かびあがる。もともと相手が公然と恋人になった分、頬よりも性的ニュアンスの強い舌が、糧としての現存を賦与する器官となる。彼女との同棲生活で、「毎晩、夜遅く部屋を離れる前に彼女は私の口の中に舌を滑りこませる」のだが、それは「日々の糧（……）’殆ど神聖な性格を持った滋養に富んだ食べもの」（un pain quotidien .. un aliment nourrissant et ayant le caractère presque sacré, III. 10）のようであり、そうした晩に味わった「心の安らかさ」はコンブレの夜のそれを想起させるという。なお彼女の舌は、「母親的で、食べられはしないが滋養に富む神聖な舌」（sa langue maternelle, incompressible, nourricière et sainte, III. 497）とも表わされて、愛と食欲が母幻想において不可分に結びつくことをやはり示している。なお神聖なというのは母の頬が聖体パンに比較されていたことと通じるだろう。

こうした食べものとしての母幻想は他にも多様なかたちで見られる。サン＝タンドレーデールザールの聖女像の乳房は「袋の中の熟した葡萄」のようであり（I. 151）、アルベルチヌは胸が「二個の果実のように熟し」（III. 79）、その目覚めは「渴きを癒す果汁のほとばしり」である（III. 387）。台所女の妊娠は「人眼にふれることもなく成熟に達した果実」（I. 109）にたとえられるが、この *filie de cuisine* の出産自体彼女の職分上この幻想をかもしれない。また台所女が皮を剥かされる虹色のアスパラガスは、実は「面白半分に野菜に変身した魅力的な女性たち」なのである（I. 133）。第一あのマドレーヌ菓子が、「襲の下のはっとりした官能的な貝の肉身」といい、大文字を使って娼婦マグダラのマリアを仄めかした点といい、愛と食べものをみごとに一体化したイメージをすでに提示していたわけだ。そういえばコンブレの夜、少年が母の接吻を奪われたのは、彼女が来客のスワンに食事を供するた

めであった。スワンが母の食事を食べることは、それによって奪われた接吻を生きるのに不可欠な食べものとみなす息子には、愛の饗応をうけるにもひとしいことだったのではないだろうか。だから食堂は「禁じられた」ものとなり、さらに愛する女性がいる「快楽の場所」に比較されるだろう。スワンが話者の遠縁のものの家に足しげく食事に通うのはその料理女との情事をたのしむためであったし、實際彼の食べた料理は情婦の作ったものだったろう。

愛と食べものが未分化あるいは一体化している時期に、もし母が子に食べられることを受けいなければ、それはそのまま愛の拒否となるだろう。さきほど最初の愛の特権的性情を草稿から引用したが、実はそこで問題になっていたのは「女性ではなく、花に対する」愛であり、とくに山査子の花に対してであった（新 1853）。この花は「私の最も深い過去」に根差し、それをみると今でも感動し（bid）、幸福になる（新 1854）。ところでこの花は薔やリンゴの花より「欲望をそそり神秘的」（新 1858, 859）なのだが、その理由は、「その良い匂いのする花が食べられる実をつけないので」、「その甘美さをどうすれば自分のものにし、より親しく享受できるのかわからない」からだと説明される。実が食べられればそれによつて花の魅力を「自分の体内に摂りこむ」ことができるのだ。

花は、『花咲く少女たちの陰に』という題が典型的に示すように、換喩的にも（「女性ではなく、花への」愛）、暗喩的にも（山査子は「色白の少女」（I: 112）、女性と重なりあう。そして話者にとって女性とは「母」を下絵として持たなければ、愛の対象とはなりえなかった。すると最初に愛した花とは、最初の女と同じ人物を、隣接的あるいは二重写しとしてさし示すことになるのではないか。やはり草稿でだが、話者が病気の時にこの花を持参した女性はグピ夫人になっている（新 1853, 858）。詳細は省くが、ブルーストにおける病気の意味（後述）と、まず『ジャン・サントウイユ』では母のサントウイユ夫人が、そして何より最終稿では話者の母（I: 922）がこの役を

勤めていることなどからみて、おそらくグピ夫人も〈母〉の一人であろう。では、山査子の花の実は食べられないので、「グピ夫人の甘やかな頬と同様に所有することができない」〔新1.853〕とはどういう意味だろうか。食用の実をつけない花とは、じつは愛することを禁じられた女性の存在を語っているのではないだろうか。

話者がこの花を最初に見たのは、母と比較される〔III.648〕聖母マリアの祭壇においてであり、その雄シベは純白 (*étamines blanches immaculées*, 新1.858)、つまり汚れない、白であった。実をつけないことと汚れないことは同義的ではないのか。この花が食べられる実をつけないというのは、汚れを嫌う処女、男に愛を拒否する女性がそこに暗示されているように思われる（この花の棘とともに）。しかしなぜ拒否するのか。アルベルチヌの舌は「母親的で、食べられはしないが滋養に富む神聖な」ものであったが、そこでわざわざ食べられはしないと断わりをいれているのは、それが本当は食べものであるという暗黙の前提があつて、そのうえで食べられない、つまり話者にとって所有しがたい女性であることを仄めかしているのではないか。多分その理由が最初の「母親的な」という形容詞にこめられているのだ。なお彼女の名前 *Albertine* と花の名前 *aubepine* がアナグラムの関係にあるばかりか、同一の意味素を抱えているのも理由があつてのことだろう。 *alb-* は *aube* の語源のラテン語形であり、ともに白という意味なのである。ジルベルト *Gilberte* はアルベルチヌと意外にもアナグラムの関係を持ち〔III.641〕、また彼女以上に山査子の花に結びついているが、彼女がこの花越しにはじめて姿を現わした時、少年はそこに、「違反することのできない自然の法則によって私のような子供には近づきえないある幸福」〔I.142〕が存在するのを感じる。自然の法則とは、自然の性質に根差すかと思われるほどに早くから子の心に植えつけられた父の掟であり、それが母への愛という「ある幸福」を禁止しているのではないだろうか。純白で食べられる実をつけない山査子に重ねられる女性が食べられない、つまり所有しえないのは、話者のような子供にとつてそうであるに

すぎないのだ。子供にとつて最も親密な絆で結ばれた母は、同時に近づきえない唯一の女性でもあるのだ。この父による禁忌が、ブルーストの登場人物が女性に感じる「近づきたい」「のりこえがたい」「不可能」(inaccessible, infranchissable, impossible, III. 989) という印象を部分的にひきおこすと同時に、かれの愛は〈母〉にしか向けられない以上、禁忌が逆に愛を成立させる前提条件にもなるだろう(トリスタンの愛がそうだったように)。なお食べられない〈山査子Ⅱ母〉の系列に対して、〈マドレーヌⅡ母〉のように食べられる母の系列も存在する。これはここでは立ちいらない女性の二面性という問題にかかわるが、前者が聖母マリアに結びついているのに対して、後者はもう一人のマリア、娼婦のマグダラのマリアに関係しているのは偶然ではないだろう。もつとも処女と娼婦は対立する存在ではないし、禁断の実をつける山査子Ⅱ聖母マリアの方が子を宿すことにもなるのだが。

六 習慣という母幻想

さきほど祖母の類Ⅱ乳房に言及したが、彼女もアルベルチヌへといたる代理的な母の系列に属することは間違いない。母の母である彼女が話者のしつけに関して母と同じ厳格な規律を実践し(『363』)、母が彼女の死後突然祖母へ変貌してしまう(II. 768-771)といった両者の類縁性も無視できないが、それ以上に彼女が話者の不安と安らぎに果たす母的役割のためである。バルベックに到着した晩、初めての土地の敵意に脅え、初めてのホテルで「孤立し、いっそ死んでしまいたい」とまで追いつめられる話者の不安を、パリを発つ時別れた母に代わって救うのは彼女だった。彼女の胸の中で悲しみから解放される話者の姿は、コンブレの夜の出来事をそのまま再現している。このもう一人の母としての祖母に関して二つの点を注意しておきたい。一つは習慣の問題である。バルベックでの最初の夜に話者が覚える不安と悲しみは、習慣の欠落による。旅行によって習慣が破られたためにそのなか

に保護されていた人間を孤立させ不安に陥れたのだ。しかし『失われた時』の習慣とは、頻繁に繰返された行動や生活の様式といった通常の意味にとどまるものではない。もっとはっきりいえば、これも話者の母幻想に濃く染められた概念のように思われるのだ。駅はそれが遠隔の地への移動を実現する点で「魔術的な場所」であるが、同時に「悲劇的な場所」とも呼ばれる。というのもそこでの「出発」は「つい今しがたまでいた、慣れ親しんだ部屋」との訣別だからである（「the」）。しかしそのうえ、駅では「鉄道での出発とか十字架の建立のような恐ろしくて荘厳な行為しか行われない」と、出発をここまで深刻に考えているのを見ると、それが打破る習慣も普通考ええるようなものとは違うのだとそれだけで思われてくる。パリのベッドで思い浮べる憧れのバルベックの光景はたのしい。しかし「到着した晩、私は私の身体には未知である《私》の部屋なるものに案内される」のだとまで考えた途端、はや身体が抗議し反撥しはじめたという。この反撥は、父の都合で「母と一緒に来ないことを出発の前日になって知った」時ますます激しくなる（ind）。反撥とは、単に未知の世界への恐れだけではなく、母との別離にも向けられているのである。そしてこの二つは同じ感情の裏表でしかないだろう。この反撥によって彼もしくは彼の身体がしがみつこうとするもの、そして出発がその崩壊を招くもの、つまり母との共生、それが習慣と呼ばれているのである。この出発は彼に次の残酷な認識に目を開かせる。「私ははじめて私の母が、私なしで、私のためにではなく生きること、私とは別の生活をすることができることに気が付いた」（「648」）。ということは、それまで母と息子はきわめて親密な生活を送っていたということである。そこに形成されていたある生活の形式、それが習慣だった。つまり私のために生きている母とたえず一緒に暮らすということである。習慣とは、はるか以前に失われたであろう母子一体幻想にできるだけ長く浸るための装置のようなものである。それが出発とともに崩れ去った時に話者が覚える未知の世界における孤立の不安と悲しみは、コンプレの夜に母の接吻がもらえないで陥った幼児の心理

と等質であるといわねばならない。ともに、話者が「この世で抱きうる最大の欲望」だと言明した「母を部屋に引きとめておくこと」(garder ma mère dans ma chambre, I. 43)が出来なくなつたことから生じている。それだから祖母が母の空位を埋めて不安を救わねばならなかった。

しかしバルベックから戻れば再び母との習慣は取返されるのだろうか。話者の出発への反撥には、「私の両親もいつかは死ぬのだ」という考えがしばしば私にひきおこした恐怖の念」(I. 670)が混じっている。駅が悲劇的な場所となり、十字架の建立のような「恐ろしくて莊嚴な行為」しか行われないうのは、死の儀式への暗示ではないだろうか。駅での母との別離には死別の気配が漂っている。それはとにかく、新しい習慣が生まれれば前の習慣の破壊に伴う不安や苦しみは乗りこえられる。げんにこのバルベック行きもジルベルトとの恋の傷手を、住む場所をかえ別の習慣をうちたてることで癒そうという心づもりがあつたし、それはそれで効を奏するのだが、しかし話者にとって新しい習慣を樹立することは可能なのだろうか。母の後に祖母がくることで、名称的変更はあつたものの、むしろ同じ習慣の構図が保持されたというべきではないか。アルベルチヌとの同棲においても、「私はその日々のおやすみに対して子供のような欲求を抱きはじめている母のように」彼女をそばに置いておきたいというのだから(III. 111-2)、同じ習慣が継承されているわけだ。いやその習慣を継続させるためにアルベルチヌは愛されたといった方が正しいのだろう。したがってアルベルチヌが発見し、やがて事故死する時の話者の苦悩には、習慣が大きな比重を占めるが、それがやがて乗りこえられるのは、すでに見た通りである。彼女が失踪をとげた直後、一旦崩れだすと「なににも増して恐ろしい苦悩をひきおこす」習慣の新しい様相に話者は直面する。「アルベルチヌを私のそばにおく」という習慣をあまりにつけてしまった」ために(III. 420)、習慣の反撥がその分だけ激しくなるのだが、ここに母と別れてバルベックに発つ時の苦悩と同じものを認めてよいだろう。以降、彼女の忘却にいた

るまでの苦悩は、習慣——つまり〈母〉をそばに置く習慣——の破壊に伴うものである。しかしこのアルベルチーヌの忘却は、結局習慣の忘却ではない。むしろ話者のその後の少女漁りは、愛の起源としての母との生活以来人にかえて連綿とつづく習慣が、それによってまたしても更新されたことを語っているのだ。「ひとつの愛は、それが忘れられても、次にくる愛のかたちを決定しうる」のであり、最初の女性との間に形成された「日々の習慣」はその起源が自分でも思い出せないのに、丁度意味のわからなくなった習俗のように、次の女性に伝えられる〔III. 67〕。ところで、話者にこの習慣をつけさせまいと努力した人物がかつてはいた。それはこの習慣をつけさせてしまった当の母親である。懦弱の兆しのみえた息子に規律を教えようと望んだ彼女は、可哀そうな息子と一緒に寝室に行つてやれと勧める夫に、おずおずとだが抗議するだろう、「この子にそんな習慣をつけさせるわけにはいきませんわ」(on ne peut pas habiter cet enfant, I. 36)。「習慣をつけるとかいう問題じゃないよ」と妻の反論を一蹴した夫の考えはしかし裏目に出るだろう。「悪はおかされ」、「その夜はある時代を開いてしまふ」のだから〔I. 38〕。アルベルチーヌまで続く強迫観念的な母幻想の時代を。あの時に「すべては決ってしまったのだ」〔III. 104〕と話者はのちに回想するだろう。

この時話者の悲しみは「もはや罰せられるべき咎ではなく、私の意志とかかわりのない mal 「悪」病氣」とみなされるようになる。ある種の年齢になつてもやみがたく続く母への執着は、彼に「責任のない神経の状態」としてはれて公認されるのだが、普通の子供なら到底許されそうもないことが、なぜ彼にはこの時を境に突然許されてしまったのか。一言でいえばそれはやはり彼が病人だと判断されたからである。祖母との関連で指摘しておきたい第二の点は〈病人〉という奇妙な身分についてである。バルベックのホテルの敵意にみちた未知の部屋で、不安のあまりいつそ死にたくなる話者を救いに駆けつける祖母は、ふしぎといえふしぎな服装で登場する。「家族の一

人が病気になるいつも家で着ることにしていた「ベルカル織の部屋着」をまとっていたというのだ〔I. 667〕。話者は時々呼吸困難に陥ることがあるらしい〔I. 651〕。しかし今の場合その病状は問題になっていないし、かくして現れた祖母もどんな病気であれ孫に手当を施した形跡はない。ただ彼を優しく抱擁してやるだけなのだ。それならば「女中と看護人が着る上つ張り」をわざわざ着てくるには及ばなかったのではないか。おそらくそれは、彼女によって払いのけられる話者の悲しみが、コンブレの夜以来病氣として認められていたからなのである。どういう病氣であるかは語られていない。しかし病人であるなら、すなわちベッドに横になり、かたわらには常に母が付きそい、その看病を受けねばならないことが認められた存在であるなら、その病名など重要ではないのだろう。第一、母に看病してもらうことが目的のこの病氣、いわば病氣のための病氣をどう名付ければ良いのだろう。いずれにしても病人とは大人であつても子供でいられる、そして「母」に介抱されるのを社会によって認められた存在なのである。後指をさされずに母幻想に浸れる人間なのだ。コンブレの夜に雇い、バルバック到着の夜に再発した病氣とはそういうものだった。だから祖母は「母」になるために看病用の部屋着を着て現れたのだ。この病氣の手当とは、ひたすら「母」になること以外にはなかったからである。

七 出発

われわれは話者がそのもろもろの母幻想的症状からみて、そして他方で母の子育ての厳格な「方針」からいっても、原関係の障害に罹っており、そのために「母」から離れられないのだという診断を下した。出発というテーマが重要な理由もそこに求められる。出発とは「母」からの出発であり、それまで心地よく浸っていた母幻想的習慣の打破を招くことである。しかし少年の話者にとって旅行は真の幸福に到達する手段であり、はるかな土地は彼に

強い憧憬の念を吹きこんでやまない。だから駅はそれを実現する「驚異の場所」であつた。だが同時に母との別離のせいでそれが一転して「悲劇的な場所」に変わることはすでに見た通りである。

アルベルチーヌとの同棲中も、話者はヴェニスへの旅行を考え、他の少女たちへの欲望に駆られて、彼女との別離を考えるが、結局〈母〉を失う不安はあまりにも強くてそれに踏みきれない。「囚われの女」では、彼女をすっかり掌中にしたという安心感からくる倦怠と、ゴモラの疑惑に基づく嫉妬の回帰がくりかえし語られるが、別離の意図はより強い不安の揺りもどしを招くことでかえって彼女への依存を深めてしまう。話者はこの愛着の絆を自分から断つことができるだろうか。

出発は母からの分離であり独立である。しかし話者はそれを拒み、母の隷属下に自分をおこうとする。それは母が先に子を拒否したからである。それが原関係の障害をひきおこしたのだ。母の拒否は二度行われる。一回目は出産である。胎児は、食べもの・排泄・呼吸などあらゆる生活において、母との完全な一体感に浸っている（あるいは、自覚はないのだから単に一体をなしている）。したがって出産による分離は、母による子の樂園追放であり、この母の拒否は生涯消えることのない傷、出産外傷（W・ライヒ）を子に残すだろう。出産時の泣き声は、まだ肉体的にも用意の整わない時期尚早の段階で未知の世界に放り出された孤立の不安と恐怖の叫びである（バルベックの見知らぬホテルで最初の夜を迎えた話者の不安はこれと質的に変わらないだろう）。またそれは自分を拒否した母を呼び戻し、一体感の樂園に帰ろうとする訴えの叫びでもある。この叫びはしばらくは効力がある。胎内に戻ることはできないとしても、母の愛撫や抱擁によって擬似的にその樂園の状態は再構築されるし、それによって樂園すなわち睡眠に入ることができる。睡眠を破る生理的欲求も、やはりその泣き声がちまちま出現させる母の身体によって充足される。いや泣かなくても、他人の保護なしには生きてゆけない子に対して、母からの積極的な世話や

愛撫がたえず注がれるだろう。出産によって危機に瀕した母子関係はこの手厚い看護によって恢復しうるが、しかしこの時代はいつまでも続くわけではない。第二の拒否がやがてはじまる。母はなぜか次第に間遠にしかやって来ず、ふんだんに浴びせた愛撫も減つて態度も少し冷淡になる。呪文の心理的起源ともいわれる泣き声の威力も衰え、子は泣いたまま放つて置かれたり、遂には叱られたりするだろう。ちなみにこの泣き声の効力の失墜は、それが分節化されて、感情のみならず思考や客観的描述をも人に伝えうる言葉にかわる契機をなすものと思われる。さらに母には自分と同じような存在が他にあって、そちらに同じような愛情を注いでいるらしいことに気付く。その愛情はしかし、一度拒否した母への不信から疑ぐりぶかくなっている子にはただでさえ自分に対するものより強くみえるだろうし、ましてライバルが弟や妹であればそれは単なる思いこみというわけでもない（スワンのフォッシュヴィルへの嫉妬はこうした認識に基づく）。それはともかく、すべて自分に向けられていたはずの愛情がこうして分割されることは、それ自体が子に苦痛を与える。今度こそ彼は母子一体の樂園からむりやり追い払われ、自立を迫られる。しかし子はやがてはるかに恐るべき、宿命的なライバルの存在に気付く。この存在の出現が子の愛を悲劇的たらしめるをえないものにする。母は生理的さらに精神的欲求充足において絶対的に依存するかけがえない愛の対象であるが、実はこの女性が他の男の所有物であり、彼女の愛はこの人物の許可をえて一時的に子に借し与えられていたにすぎない。この母の愛を独占する人物に、子は生誕はともかく生存を経済的法律的に負っており、その限りで彼の意向には屈服し、とりわけ自分の所有であると思ひこんでいた母が自分の手から逃れていくのを黙って見ていなければならない。しかし唯一絶対の女性との別れは、まさに生木を裂かれるにひとしい苦痛であろう。ちなみに話者が愛による苦悩を礼賛する一節で、「われわれは幸福な時に信頼と愛着にみちた、非常に甘やかな強い絆をつくる」と述べているのは、他ならぬ乳幼時期の母子一体感について語っているように思えるのだが、すると次

に続く「この絆を断つことは不幸と呼ばれるとても貴重な苦しみ[、]をひきおこす」〔III. 90〕という部分で、珍らしく苦しみに *dechirement* (引裂くこと) という語を使っているのはそれがまさに母子分離の苦悩を語っているからではないだろうか。

話者の父はこうした妻への権利を、どちらかといえば強く主張する気まぐれな暴君的家父長のようなものである。「私の父は、母や祖母によるもつと穏やかな協定において私に許されたあれこれのことを、必ずといっていいほど拒絶するのだった。というのも父は例の《原則》など意に介さなかったし、彼にとつては《人権》も存在しなかったからだ」〔I. 36〕。彼は息子への妻の愛情を監視し、その制限に超法規的措置を講じる。「そんな下らない真似はするんじゃない。さあ寝に行きなさい」〔I. 27〕と、妻の原則を踏みにじり、息子の権利であるおやすみの接吻をみだりに奪うかと思うと、不用意にそれを許して後で取返しのつかないことをひきおこす。話者がもう一度母に会ってから眠ろうと決心することは、彼の家庭では「きわめて由々しい事態」、「他人が想像するよりはるかに由々しい事態」を招くほどであり、「これまで私が厳しく罰せられた他の過ちと同じ類いに属するが、それよりはるかに重大なのだ」とまでいわれる。これは、その時の息子の思いつめた緊迫感とともに、父の畏るべき権威を照らし出している。そうなるも母と祖母の「原則」も、母に手紙を渡すことを禁じるフアンソワーズの「厳格な掟」〔I. 28〕も、実はその背後に息子を警戒する父の眼が光っていたわけだ。子は父の禁止を破って、すでにこれまで何度となく母子一体の状態を回帰させようとこの種の愛の過ちをおかしては、厳しく罰せられてきたことも判る。

しかし自分から母を奪う父は最も憎むべき敵であると同時に、自分より先に母の愛を占領し、その結果として生まれた自分を保護してくれる恩人でもある。父に逆らうことはできない、かといって母を断念するのも困難であるすべての息子が多かれ少なかれ直面するこの深刻な葛藤の危機を乗りきって、母と離別しないかぎり、彼はいつま

でも母の支配下に身をおいて子そのまま媚びや他の策略で彼女を引きとめようとするだろう。おそらくそんな風にして話者は病人になり、多大の贈り物をしてさまざまな〈母〉を自分の傍らにたえず引きとめてきたのだ。だがそれならなぜ、他方で彼は出発を望むのだろうか。『囚われの女』の最後の部分〔III. 341〕ではとりわけアルベルチヌとの別離が問題になる。とはいえそれは話者の仕組んだ茶番劇 (comédie de séparation, III. 354) にすぎない。相手が囚われの女の生活に嫌気がさして逃げださないように先手を打った偽りの別れ話 (ma simulation de rupture, III. 349) なのである。それがどうしたのか、これが心にもない嘘だと百も承知の当人がいざ実際に別れ話を口に出してみると、情けないことにそれだけで苦痛におそわれ心が動揺する (… la souffrance que j'éprouvais à parler de notre séparation, III. 341 ; … le trouble où me mettait ma simulation de rupture, III. 349)。⁸⁹ さらに本当に別れた時のような悲しみに胸を締めつけられてもいる。これでは到底彼女と別れることなど不可能だろう。コンプレの夜はそれもある意味で挫折した出発だったが、以降も彼は母の支配下へと引き戻されつづける。別離の喜劇を演じるとは、結局別れるつもりも気力もないからできたことなのだが、しかしまたその気持が全くなければ、冗談にせよそんな話を持ち出しはしなかったとも考えられる。かりそめの別離劇がひきおこした本当の悲しみは、実は彼の胸の底にひそむある目論見を意識を介入させずに反映していたのではないだろうか。

〈母〉への依存が強ければ強いほど、彼女のお陰で辛うじて折々の安らぎを得ている彼のなかに、返ってかすかな解放への願いが萌してきているのだ。別れ話はお芝居に違いないが、しかしそれは「われわれの意に反して囁かれた嵐の最初のつぶやき」でもある〔III. 358〕。「われわれの愛する女性といつまでも一緒に暮らしたい」と思っている、それは結局不可能だと話者は考えている (cette impossibilité de vivre ensemble …, III. 359)。苦しみさえなければ本当は別れたいという気持が彼のなかにあるからではないだろうか。それは正面からは白状されないが、

たとえば『囚われの女』で十回ほど使用される隷属に関わる *esclave* *esclavage* という語の内分けをみると、「哀れな囚われ人」(III. 308)であるアルベルチーナには四回しか使用されていないのに対して、話者の状態を表わす場合は五例に及ぶ。嫉妬から彼女を監禁している話者としては意表を衝く数字だが、それは彼女が〈母〉にそれほどまて囚われている自分の隷属状態を意識すると同時に不満にも思っていることを示しているのではないか。この隷属がむしろ相手の隷属を必要としていたのである。アルベルチーナに衣装やヨットを買い与えることは、彼女を支配するうえでの「主人の義務と負担」すなわち「特権」なのであり、「自分の女を持つているのだ」という満足を与える、「私は自分で思っていた以上に主人なのだ」と。しかしこの支配のからくりを彼は見抜いている、「思っていた以上に主人だということは、思っていた以上に奴隷だということだ」(Plus maître, c'est-à-dire plus esclave, III. 155)。こうして彼は彼女のせいで、その日街を歩いている女工、お針子、娼婦たちと知りあえないのを残念がる。ヴェルデュラン家での七重奏曲演奏の後シャルリュスたちと雑談する間にも、彼女の影は重くのしかかっている。家を出ていても「漠然とはあるが、現在部屋にいるあの少女と結びつけられているのを感じる」のだ(III. 328)。すぐわきにいるような気さえする。まるで彼女は手足の一部で、「彼女のことを思いだすと、それは自分の身体を考えるようなもので、そこに全的な隷属によって縛りつけられている憂うつ感を覚えるのだ」(ibid.)。これまで理想の楽園境であった母子一体感が、今度は逆に自由を阻むわずらわしい足枷となっているわけだ。

この夜会から戻り家の前まで来ると、彼女の部屋の窓から明りが落ちている。それをみると心が安らぎ、中にいる女性を「他人には窺いしれぬ宝物」とまで讃えるのだが、しかしその一方では「その宝物と引換えに、自分の自由を、孤独を、思考を譲りわたしてしまった」(III. 331)という苦い思いも湧いてくる。今彼がしようとしていることは、「旅に出、発、す、る、こ、と、で、は、な、く、帰、る、こ、と」である。帰るとはもちろん〈母〉の懷に帰ることだ。そして彼

は家で迎えてくれる女性のなかに「自分の人格を放棄」し、自分を「ことごとく引き渡してしまう」だろう。したがって明りの灯った窓の格子縞は、彼が自分の「永遠の隷従のために」われとわが手で鍛造した「押しても引いても動かない黄金の格子」のように映ってくるのである。⁽⁸⁾

なぜ話者が、最大の欲望であり苛責ない欲求でさえあった「愛する女性をそばに置いて暮らす」生活に反撥するのか、その理由が仄みえてくる。孤独とは母子一体感の廃棄のうえに成立する、コンプレの夜からアルベルチーヌとの同棲まで話者が最も恐れている状態である。しかし孤独においてのみ、表面的自我の下に押し殺された深い自我、つまり芸術的主体が姿を現わすのだ。話者は「見出された時」で作品を書く決意を固めた時、「明日からは孤独のうちに暮そう」、仕事中は面会謝絶だと考える〔III 983〕。しかし世間のつきあいはそれで断てるとしても、アルベルチーヌの場合はそうはいかない。家に帰ると逆に、「孤独のかわりに」彼女を見出すからだ〔III 265〕。そのうえ自由、人格、要するに自分のすべてを譲りわたしてしまっている。では「私が探している真実は（……）私の中にある」〔I 45〕以上、まずその私を彼女から、〈母〉から、奪い返さねばならないだろう。それが話者にとつていかに困難をきわめるかはもはや改めて説明するまでもない。となると彼女に姿を消してもらいう以外に方法はないのではないか。いいかえれば〈母〉を殺してもしないかぎり、小説を書く年来の願望は達成されえないということになる。実際アルベルチーヌは彼が作品を書きはじめる前に死ぬだろう。それは偶然だったろうか。彼は祖母とアルベルチーヌの死に、一見いわれのない罪悪感を抱き、まるで自分こそ殺人事件の真犯人であるかのように吹聴するが、それは理由のないことだったろうか。そういえばブラレンベルグが母を殺害した時、彼女は息子に「何とすることをしたの!」と叫ぶのだが、ブルーストによると最後の瞬間に息子にこの非難を投げつけない母親はおそらくいないという。この問題は今はこれ以上追求しないが、話者のように〈母〉に深く依存した人間にとって出発

とは、この〈母〉を殺すことなしには成就しえなかったと考えてよいのではないか。

八 監禁

ブルートスは『トリスタン』の二幕の密会の場と三幕の船の到着の場を、再会の「間近に迫った喜び」の表現として注目し、とくに牧笛の奏でられる後者の場面は「これまで人間の魂をみたした、最も驚異的な幸福への期待の表現」だとも思い入れ深く断言していた（三章参照）。これは「愛する女性ともう一度会う」ことが、ブルーストにとっていかに切実な問題であつたかを反映している。実際この欲求は『失われた時』の随所で、話者の愛のうちに不安と苦悩あるいは歓喜に彩られて浮かびあがつてくる。コンブレの夜における母への愛（*le moment de la revoir ; sans avoir revu maman*, I. 34）以来、ジルベルト（*revoir Gilberte, qui m'eût été si délicieux la veille*, I. 625）、バルベック行き汽車から見たミルク売りの少女（*mon désir de la revoir*, I. 657, cf II. 780）、浜辺の少女たち（*la promesse de les revoir*, I. 824）、遠くパリにいる祖母（*j'en vie de revoir ma grand'mère*, II. 89）などを経て、アルベルチヌ（*au désir de revoir la figure veloutée*, II. 733 ; *plus de paix pour moi avant que je l'eusse revue*, III. 112）へと作品全体を縦断している。この欲求は今まで見た話者の愛の性質からいって、母の不在におびえて泣いて母を呼び戻そうとする、孤立した幼児の不安な衝動のうえに生まれているように思われる。トリスタンは、瀕死の床にふしてイズルデとの歓喜の再会を待ちうけた。へもう一度会ふ。テーマは、話者の場合もこの病めるトリスタンの姿勢と結びついているが、それはこの欲求が幼児の不安に根差しているからである。そして彼は病氣——神経の、つまり愛の病氣——になることで自分の幼児性を〈母〉に認めさせようとしてきたのだから、この姿勢はたえず呼び戻されることになるだろう。それによりこの姿勢は彼の真の快樂とも関わっている。彼を女性へと向かわせるの

は、夜彼のベッドにかがみこんだ母のおやすみの接吻によって死の不安を取除いてもらい安らぎをえたいという欲望ではなかったか。それが、はるかな遠い夜に味わったはずの母子一体の楽園を再現する特権的光景を構成するのである。だがそうして得られた安らぎは何のために要求されていたのだろうか。それが常に夕方ないし夜に要求されていたこと、それを与える接吻が「眠る力」(I. 13) をもたらしていたこと、いや接吻とは専らおやすみの接吻であり、そこに〈母〉の「現存」が充分にこめられていない時は「一晩中泣きあかした」(III. 113)、つまり眠れなかったことなどを思い出せば、結局それはただ単に眠るためだったと考える他はないだろう。不安なく安らかに眠りにつくこと、どうやらそれがドン・ジュアン的な話者のひたぶるな女性追求のやや意外な究極の目的だったことになる。おそらくそういう眠りのみが、母の二度の拒否のかなたにある胎児の楽園の夢へと彼を連れ戻すことができたのである。

しかしこの母子一体の夢を見ることがいつでも可能だったわけではない。あのダルトツィは夜の不安を女性の抱擁で粉らわそうとやや滑稽な女漁りの現場を目撃されるのだが、それは必ずしも上首尾には終わらなかった。話者の場合も、コンブレの夜の「ママにもう一度会わないかぎり眠るまいという決心」(I. 33) は、はからずも父の暴君的気粉れから幸運な結末を迎えるものの、それは例外であってシャンゼリゼのジルベルトを始めとして、その後の愛は愛する者ともう一度会えない悲しみや嫉妬の苦悩で充ちみちている。ではこの逃げ去る女ともう一度会う可能性を確保して、安らかな眠りを得るにはどうすればよいのか、が当然問題になる。それに対する答えが、アルベルチーヌの監禁だったと考えてよいだろう。監禁とは、これまで嘗めた苦い経験に立ってコンブレの夜を、時と所と母役を変えて再現するためのより確実な方法だった。この方法を取るについて話者が「夜の不安」と、相手の女性を誘惑にさらさないため⁸²⁾という二つの理由を挙げている(III. 18) のも、この趣旨を語ったものと理解できる。

もつとも、コンブレ以来味わったことのない安らぎをアルベルチーナの接吻から受けるとしても、他方ではやはり母から受けた悲しみや苦悩もこの同居生活には欠けていない。だからそれはむしろ、幼時の母体験のすべてを辿り直しているというべきなのかもしれない。⁽⁸³⁾

ところで話者にとってアルベルチーナは、いわば社会的にいつて何なのだろうか。〈母〉ではあるが母ではない、スワンが苦悩に負けて結婚したオデットのように妻でもない。では愛人というべきなのだろうか。しかしそれにしては、他の誰か（女性）との恋愛関係への疑惑から嫉妬にかられて自分の家に連れてきて住まわせている女性なのだ。やはり囚われの女、つまり奴隷の女なのではないのか。外出を許さないわけではないが、それは「私の監視下」に、「私が望む時」、彼女を彼のそばに連れ戻す条件が整った場合に限られるのだから、それも「監禁の外的延長」にすぎないだろう [III. 126]。

こうした愛のかたちを望むのは話者だけではない。ゲルマント公爵もその情婦たちを「次々に監禁し」、他の人間に会うことを許さなかった [II. 480]。周知の通り公爵は、ジョッキークラブの古参の副会長で、社交界に君臨する「尊大で堂々とした」「オリュンポスのゼウス」 [II. 284] のような人物なのであるが、このことは監禁が、〈母〉を全的に所有する不安な幼児的欲求に発しているながら、実際は子よりも父によって遂行されることを思い出させる。女性を囲ったりヨットをかうには相当な財政的裏付けを必要とするし、子にその権限はないからである。公爵における幼児的欲求と家父長的容貌との結びつきはそれによって説明できる。しかしこの家父長的権威はこの欲求と結びつくとしばしば行きすぎたものになる。寵愛をうける女性は愛の奴隷のような存在になるのだ。もう一人の監禁趣味の持主、アルジャンクール氏は征服した女性をつねに「無害な男たち」の間に置いておくのだが、この男たちは「ハレムの番人の役割」を果たしていたという [III. 273]。

スルタンとハレムの女奴隷、そういった方がアルベルチーナの場合も適切であろう。彼女も嫉妬深い主人に奉仕する以外の欲望や自由は許されず、一種のハレムに隔離されていなかったか。彼女は話者というアハシエロス王の定めた「苛酷なベルシアの掟」[III. 126] に縛られている。この女奴隷は最終的には主人に安らかな眠りをもたすために雇われているのだから、折角のこの貴重な眠りを乱してはならないという掟は、彼女といえども服さねばならないだろう。だから彼女は朝遅く、主人の眼を覚ましはしないかと恐るおそる寝室に入ってくるのだ。「アルベルチーナの最大の恐怖は、私がうとうとしている時に部屋に入ることだった」[III. 120]。彼女は話者に、「この無礼者が死を求めに来しや？」[bid]と言われはしないか心配だったと、ラシーヌ『エステル』のベルシア大王の科白を冗談でまねるのだが、しかし彼女の立場は決してそれを冗談ですませるていのものではない。

彼女との生活がコンブレ時代の再現であり、その欲求が母への幼児のそれであるとしても、話者の立場はいつのまにか子から父へと転換している。経済力だけの問題ではない。子としての母独占の願望を叶えるには、かつて母を意のままにしていた父という専制君主の跡を襲うのがとり早いということだろう。いや実際に話者は、嫉妬についてそれは「しばしば愛の領域に適用された不安な専制君主の欲求」だと述べた後で、アルベルチーナへの自分の態度に関して、「私はおそらく、自分が一番愛している人間の(……)期待を脅かそうとするこの突然の横暴な欲望を、父から受け継いでいる」と付け加えている[III. 91]。子からおやすみの接吻を奪うかと思うと、母の原則をもとめせずにそれを与えるように命令する父は、それによって母を所有する満足を十分に味わえたと違いない。父は女性支配において今や話者にとって模範的な存在であり、アルベルチーナとの生活もその先例にならって進められているというわけだろう。

幼児的欲求と専制君主的権威との一見意外な結びつきは、話者においてたまたま生じたわけではない。おそらく

専制君主とは比喩的には、そして多分本来的にも、いわば権力をかちえてしまった幼児なのである。ともに他者性を許容せず、他人がつねに自分と同じ感情や見解を持つことを要求する。つまり欲望もふくめて自分のありのままの姿を他人に、その都合など一切構わず是が非でも受けいれさせようとする幼児の苛立ちには、なんでも自分の欲望を力づくで通そうとする専制君主の苛立ちとそのまま重なり合うのである。さらに一步進んで、後者がハレムに美女をはべらせるのは、幼児期の宿命的に所有しえない母親への欲求不満に対する歳月をへだてての、しかし性急な補償行為であり、命令を聞かない者の首を刎ねるのは、自分のいいなりになるどころか母を奪ひ欲望をことごとくに抑えつけた憎むべき父への復讐であり、その疑り深さはかつての母の愛への根本的不信に淵源するのだとはいえないだろうか。

話者が、〈母〉として幼児的に依存するアルベルチヌを、平然と「わが娘よ」(III. 76)と呼べるのも、この関係を背景にして理解できる。さらに『失われた時』では一般に、父と息子、母と娘の関係は必ずしも対立するものではなく、母と息子、娘と父が同一の問題意識を抱えうると考えてよいように思われる。話者に関してもう一例見ると、彼はアルベルチヌへの愛情を「子としての、そして同時に母親としての」それ (*tendresse à la fois filiale et maternelle*, III. 79)と呼んでいた。ここには親子関係の逆転ばかりではなく、性的にも対立したものが矛盾なく溶けあっている。このことはヴァントウイユの音楽の解釈に関して手掛りを与えてくれるだろう。

ところで監禁は、それが話者をも隷属状態におく不都合はさておいても、彼の場合はたして女性を意のままに支配する有効な方法であつたろうか。それは、肉体は拘束できるが、心を捉える助けとはならなかった。囚われの女は「自分の掌中であつてさえ、逃げ去る存在」(III. 92)なのである。彼女たちはある時まで、自分の快楽主義や遊蕩ぶりをあけすけに話して聞かせる。ところが男が嫉妬していると気付くやあわてて口をつぐみ、今度はその

一切をむきになって否定する [III. 90]。その胸の奥には「ゴモラの女と会う計画 (cf. III. 87. 91)」、自分と別れて出発しようというもくろみ [cf. III. 345] などが秘かに立てられているらしい。ところが話者にとって問題なのはこの隠された欲望なのである。愛とは「ある全体への要求」であり、それは「征服されていない部分が残る時にのみ生まれ持続する」、つまり彼には「全的に所有していないものしか愛せない」からだ。したがって彼の関心は、沈黙と嘘によって隠蔽された彼女の欲望を探ることに向けられるだろう。しかし彼女は「囚われているが心に入りこませない顔付き」 (*visage impenétrable et capté*, III. 432) をしており、いくら膝の上に乗せ愛撫しても、それは「内側から無限に通じている存在の、閉じた外包にふれているにすぎない」 [III. 386]。彼女の所有は不可能なのだ。

話者は「私の苦悩は (……) アルベルチーヌあるいは私と共にしか終結しない」という [III. 23]。彼女が生きている限り心であれこれ考えるのをやめさせるわけにいかないし、それと共に彼女を所有できない彼の苦悩も鎮まることはない。監禁はそれ自体一種の死を課することである。それは自由や欲望を抑えつける。しかしそういう気持まで押し殺すことはできない。「征服されていない部分」に愛あるいは所有欲を刺激される話者にとっては、まさに彼女のそういう心の動きこそが重要なのである。こうして監禁は徒労に帰するのだが、*l'amour non partagé* の実践者に有効な支配方法などともありえなかった。ただ強いていえば、ここでもまた死という解決策が一瞬どこかをかすめて過ぎる。話者の出発に望まれていた〈母〉の死が、今度は彼女の全的な所有のために要請されている。そうなればたしかに彼女の胸の奥に秘め隠した欲望の数々は消滅するだろう。だが愛する女性が死んでは元も子もないのだし、それはまた嫉妬の特効薬にもならなかった。それに第一話者は、彼女を殺そうなどとは思っていない。にも拘わらず、彼がアルベルチーヌの愛を占有しようとして試みたことは、結局彼女を無限に死へと近づけることだったのではないだろうか。そのどこかで、失われた母子一体の樂園が見出せるのではないかと夢見て。

ところがこの夢が一度だけ叶えられるのである。生きたまま死なせるといふ監禁のめざす一見達しえない理想が、永続的ではないにせよ夜毎ベッドの上で、すなわち彼女の眠りにおいて実現されるからである。

だがその問題に入る前に、もう一人の母幻想者、話者の原型ともいべき人物の愛に一瞥をあたえておきたい。

九 スワンの愛

スワンは結婚後、オデットが全然「自分の好み」の女ではないことに気付く。なぜあんな女性のために死のうと思ふほど苦しまねばならなかったのか？ いやそれにしても彼女は交際の初めに、どうして彼をあれほどちやほやしたのか？

話者の不安な女性追求は母幻想にとりつかれていた。いや、〈母〉のうえにはじめて愛が可能になっていた。それに対してスワンの愛には、そういう始源的母とのつながりを窺わせるものは見当らないように思える。にも拘わらずそれは、これもやはり子としての愛の経験そのものではなかったかと思われるのだ。スワンが話者と生成論的に同根の存在であったこと、コンブレの夜の話者の不安と夕食に來たスワンの愛の苦悩の類似性の主張（130）、ヴァントウイユの〈小楽節〉を通して浮かびあがる話者とアルベルチーナ、スワンとオデットの愛の等質性（二章参照）などは、すでにそれだけでそうした推測を招く材料となるだろう。ここではまず話者の愛との具体的な類似点をさらに幾つか挙げておくことにする。

たしかに彼の愛を読み返すと、それは今更ながら話者の愛とあまりにも似ている。話者の母への子の幼児的愛の特徴をなすと思われる諸要素が、多少の変奏を伴いながらも殆どそっくりスワンの体験となっているからである。第一は享樂の場所からの排除である。これまで何度となく問題にしてきたコンブレの夜、話者は父に追われて、皆

が集まっている「敵意のある禁じられた食堂」の母に会いに行けないでいるが、その時彼が感じた不安は、「自分の愛する人間が、自分がいあわせず、またそこでその人と一緒にすることもできない享楽の場所にいる」のを感じることから生じると分析される〔J.30〕。フランソワーズが母に手紙を渡してくれるが、これでもう一度会えると喜んだのも束の間の嬉喜びにおわって、「母は来なかった」、手紙への返事も拒まれる。ところがスワンも「そういう経験をしていた」という〔J.31〕。愛する女性がどこかの邸宅の舞踏会や劇場の初日に出かけると聞いて会いに行き、折よく出くわした共通の知人に中の女性に急用があるむね取次ぎを頼むと、「あの人も喜んで降りてきますよ、あつちで退屈しているよりは……」などと快く引受けてくれるのだが、結局彼女は降りてこない。「この甲斐なく終わった喜びを、スワンもまたよく知っていた」〔J.30〕。「第三者の善意は女性には効力のないもので、彼女は、自分が好きでもない男が遊興の席まで追いかけてきたと思って腹を立てる」〔J.31〕。この女性にオデットの面影を見ることは不可能ではないだろう。彼女は、二人の愛を育くんだヴェルデュラン家のサロンからスワンが追放された後も、その排他的なグループの一員として食事や行楽とともにする。そのためにスワンは彼女に会えない苦悩を嘗める。たとえば彼女が皆と郊外に泊りがけで出かけると、一緒に行きたくても立ってもいられないほどののだが、彼女を怒らせるのが恐くて地図でその辺を「まるで愛の国の地図」でもあるかのように眺めくらすしかない〔J.30c〕。彼女と同じ夜会に招待されたような場合、「彼女が他の人たちと楽しんでいるのを、自分が見張っているのだと思われる」は後が恐いとばかりに、気をきかせ一人先に帰らねばならない〔J.30f〕。この場合、ヴェルデュラン家のサロン、旅行先、相手だけ残った夜会が、スワンが排除された「享楽の場所」である。愛する女性が自分に「禁じられた」場所で楽しんでいるのを外から指をくわえて想像しては苦悩するという共通点ははっきり窺えるだろう。ただしこの場合はスワンの愛に母幻想がただちに認められるというより、むしろ寝室に來ないで返

事も拒んだという母を、オデットのようなつれない恋人と比較した少年の愛の特異性の方が目立っているように思われる。

オデットを残して一人夜会から帰ったスワンは、後で彼女が味わう楽しみに嫉妬を覚えながら、「不安のうちに寝る」(「237」)。「夜の不安」の点でも両者は共通しているわけだ。その意味に最初スワンは充分に気付いていない。彼はオデットと愛しあうようになってからも宵の口は他の少女と逢びきをしているが、それは「後でオデットに会えるのを確信している」からであった(「218」)。ヴェルデュラン家の夜会の後、「一緒に帰る権利」が確保されていればそれでよかった。一緒に帰れば、「別れた後も、誰も彼女と会うことで二人の間に割りこんで来ないし、まだ彼女が自分と一緒にいる気分が損なわれない」からである(「219」)。ところがある晩ヴェルデュラン家への到着が遅くなつて、彼女がすでに帰つたと聞かされた時、彼は愕然とする。「あわてふためき、心がたかぶる」(「220」)。実をいえば「どうせ晩に彼女に会つて、彼女の家まで送っていくことになる」のだと多算を括り、彼女に会うことに無関心とかもう会いたくないという気持さえ装っていた彼は、その日も「避けられない一緒の帰宅」のことを仏頂面で考えながらやってきたのだった(「226」)。夜のバリをあちこち必死に探しまわるスワンは、彼女との「毎日のデート」の自分にとっての重要性によりやく思い当る。それからは「毎晩、彼は彼女を家まで送つて」いくだろう(「234」)。またある晩、彼女の家にやって来ると、頭痛がするからすぐに休みたいと早々に追いはらわれる。スワンは誰かを家に引きいているのではないかという妄想に苦しめられ、自分が排除された享楽の場所、彼女の寝室での密会の現場をとり押さえてやろうと、真夜中一時間半も経ってからわざわざ様子を見に引き帰してくる(「272」)。この時はスワンの感違いに終わるのだが、夜愛する女性と最後に会いたいという欲望は、夜寝る前に母と会つて接吻によって安らかに眠りたいという話者の欲求とかなり似通っている。

となるとそれに絡んで、〈彼女にもう一度会う〉〔I. 306〕テーマも当然浮上してくる。それはオデットが先に帰った夜以来、彼には不可欠の欲求となっているのだ。しかし二人を結びつけたヴェルデュランのサロンが今度は「二人が会う障害」〔I. 289〕として立ちちはだかるや、それでもなくともフォルシュヴィルというライバルの出現以来とみに素振りのあやしかった彼女は、それを楯に彼のあわれな欲求をもはや簡単には叶えてくれなくなる。その彼女から、一日二日どころかなんと二週間もバイロイト巡りをしたいといわれて怒ったスワンは、借金でも申し込んできたらあたまたから撥ねつけて意趣返しをしてやろうと思いはするが、いざ彼女が実際に借金依頼の手紙をぬけぬけ書いてよこすと、「もう一度会うこともなく喧嘩別れで」旅立たせるより、金を与え旅行もこっちから勧めてやれば、喜んで駆けつけて来はしないかと気弱く思い直して、そうすれば「一週間近く味わっていない、そして他のなにもにも換えがたい彼女に、会う喜びを得ることができだろう」〔I. 304〕と仇な望みをかける。あるいは彼女に手紙も書かず会おうともすまいと決心する〔I. 305〕。「彼女に会わないでも平気でいられるのを見せつける」のはどんなにいいことか〔I. 306〕と短い別離に耐えるのだが、それによつて返つて「彼女にもう一度会う」欲求がより切実にこみあげてくる。あるいはこちらから会うまいと思つていた矢先に彼女の方から逆に会う約束を引き延ばしてきたりすると、初めの決心はどこへやら、さつそく家まで駆けつけて「翌日からは毎日会ってくれるようにと頼みこむ」〔I. 306〕始末。こゝにはベッドに横になって母の接吻を受けるあの話者の姿勢こそないが、彼の女性への要求と同じものを見出すことは困難ではない。

時として彼女との別離などその気になればいつでも実現できると思うこともあるが〔I. 307〕、結局彼にはそこまで踏みきれない。彼はオデットが旅行に出かけた時、パリに「とどまる勇氣」は確かにあった。しかし「自分から出発する勇氣は持たなかった」〔I. 353〕。スワンは初めて『ソナタ』を聴いて以来フェルメール研究を再開して

いるが、この研究のためにはどうしてもオランダの都市に行つて自分の眼である絵を鑑定しておかねばならない。ところが「パリを、そこにオデットがいる時に、いやいまい時でさえ離れるのは、彼にはとても残酷な計画」だったので、それは断念を余儀なくされる〔III. 353〕。こうして彼は「その仕事、その楽しみ、その友人たち、要するにその全生活を少しも彼に幸福をもたらさない逢い、きへの、毎日の期待のために犠牲にする」〔I. 354〕だろう。このスワンの姿に、アルベルチーナのためにヴェニスに出発することができず、おそらく仕事にも——差当りは状況証拠としてだが——掛れなかった、あるいは単に母と別離できなかった話者の姿を重ねてもよいだろう。

彼の愛は、「彼女を捉えようとする情熱」〔I. 292〕であり、それは高じて「彼女を所有したいという苦しい無分別な欲求」〔le besoin incensé et douloureux de la posséder, I. 231〕にまでなる。「全的に所有していないものしか愛せない」話者と同様に、まさにこの所有していない部分を捉えることに彼の支配欲が向けられるからである。彼もやはりオデットへの愛に「隷属」〔I. 295〕するのは、この「無分別な」欲求が充たされないまま無限に続くからである。彼の心をひきつけていたのはオデットの魅力ではなく、「彼女が今なにをしているのか刻々と知りえない、そして彼女をいつでも所有していないというあの広大な不安 (immense angoisse)」〔I. 346〕のせいなのである。そしてこの愛ないし嫉妬の知的要求は、「アルベルチーナが生活した場所、彼女がある晩していたこと、彼女が浮かべた類笑みやまなざし (……) に対するあくことのない苦しい興奇心」に翻弄される話者の「あの広大な不安」 (immense inquiétude, III. 385) と瓜二つといつてよい。この所有しえない広大さが彼女との別離を妨げていたからである。

となるとスワンが、バイロイトに行こうとするオデットを誘拐して監禁しようと思う〔I. 302〕心の道すじも今更説明するまでもないだろう。所有欲は監視を求め、監視は監禁においてより完全に成就する。もつともこの場合

は空想に終るし、のちになってオデットは嫉妬深い男が自分の好みだったために「監禁生活」(ma vie cloîtrée, III, 102)を送ったことがあると話者に打ち明けるものの、スワンはスルタン的な支配欲を、嘘と沈黙で固塗された彼女の愛の秘密をあばこうと「厳しい詮索」に揮うほかは、話者のような行為にまでは出ていない。ただし同棲して監視する代わりに、嫉妬の苦しみに屈服して結婚することにはなるだろう。それがオデットならぬ、いや若さを保って次々に愛人をつくる彼女にひきかえ、かつてそう望んだように「[31]」スワン自らの死——精神的、そしてやがて肉体的に——を招くことになったのだろうか。話者の場合は、同棲はしても結婚は自戒していた。「アルベルチヌと結婚することは(……)彼女のたえ間のない現存によって自分不在のまま生きること強いることで、私の生を駄目にしてしまうのではないか」という懸念を彼は抱いていた。すると、この点是对照的に、スワンは結婚によって自己不在のまま生きることになったわけである。

だがかつてはスワンの方が彼女の死を願っていた。「時々彼は、朝から晩まで(……)外に出ている彼女が、なにかの事故で苦痛なしに死んでくれればいいと願った」(I, 355)。そういう時彼はムハマンド二世に親近感を覚えるのだが、この人物は妻たちのだれか一人に対して自分が強い愛着に捉われたと感じるや、「自分の精神の自由を取り戻すために」その女を刺し殺したという「[32]」。スワンが愛人の死を願う動機は、完全に所有できない「母」にあまりにも隷属してそこから「出発」できず「自分の自由、孤独、思考」を奪いかえそうとアルベルチヌの死を願った話者の心情と径庭はない。母から自立しようとする子のあえぎがそこに共通して聞きとれるように思われるのだ。

スワンの愛には、話者におけるようなベッドに寝て「母」の接吻を受けそれによって眠りにつくという場面はないが、彼の女性への欲求が安らぎ(apaisement, calme)にある点は同じである。皆で遊びに行く計画から除けもの

にされたスワンは、その不安を「オデットの腕のなかで鎮めよう」とする（… apaiser dans ses bras l'angoisse, l. 284）。ヴェルデュラン家の夜会からオデットが先に帰っていた時の不安は、次の晩からの「彼女は自分を待っている（……）、自分はきつと彼女に会ってから戻ることになるという確信」によって中和されるが、その不安の「今得られた鎮静はあまりに心地よいもので、それを幸福と呼ぶことも可能だった」（l. 285）。どちらの場合も、女性が自分に近付けない場所におかれていることに由来する不安を、その女性が鎮めるという話者と同じ構図が見てとれる。「オデットの現存は、彼女のそばにいる心地よさは、彼の不安に対する唯一の特効薬だった」（l. 316）。この「現存」の背後には、話者が母とアルベルチヌに求めた現存、生理的精神的な欲求を充足させる食べものとしての母がひそんでいるように思われる。

こうした類似があるからといって、そこに嫉妬深い男の姿は浮かびあがっても、それ自体は必ずしもスワンの母幻想をただちに指し示すとはいえないのかもしれない。ただ、そう考えた方が彼の愛をより統一的に理解しようということはある。あるいはそう考えないと、そこには不自然な点が幾つか出てきてしまう。なぜスワンは「自分の好みではない」女にこれほど苦しめられるのかという問題も、表立って語られていない母幻想を介在させることで説明しやすくなるのである。

スワンの死後、ゲルマント公爵の情婦となったオデットは、彼との愛を回想して、「知的で魅力があつて、まさに私の好みのタイプの男だった」と語る。「彼女がスワンの《好み》でない間は」そうだった、と話者は注釈する。それがあのような一途な愛にまで進んだのはそこに苦悩の作用があつたからである。といつてもブルーストにおいてそれは問のずらしにすぎない。なぜ苦しむほど愛したのかが問題である。オデットの意外な打ち明け話につづく話者の考察を一言でいえば、習慣の威力の強調である。「愛において危険（……）なのは、女性自身ではなく、毎

日彼女が一緒にいる」と、習慣なのである」ce qui est dangereux (...) dans l'amour, ce n'est pas la femme elle-même, c'est sa présence de tous les jours, (...) c'est l'habitude. III. 1022)。したがって「《自分の好みではない》女に苦しめられる男」は結構いるものだ。というのもその女性がまさに自分の好みではないからこそ、油断して「好きでもないのにちやほやされるがままになり」、「その内彼女との間に『自分の好み』の女とだったら生じないような習慣が生活の中に根を張ってしまう」。ところがちよつとしたことで会えなくなると、その不在がこたえてくる。生活に深く絡んだ「無数の絆」がこうして引き抜かれかかるに及んで、苦痛のうちにその存在の緊要性に目を開かれるのである (ibid.)。たしかにオデットに最初会った頃スワンは彼女になんの魅力も感じなかった。彼女がその後足繁く会いにくるようになって、むしろ彼女に「失望」(I. 197) を覚えるくらいだが、それでも今度は是非近いうちにお目に掛らせて下さいと、「不安なおずおずした様子」(I. 197-8) でいわれれば悪い気はしない。こうして彼は手懷けられる、つまりいつの間にか「会う習慣」の形成を許してしまう。やがて彼女の紹介でヴェルデュラン夫人のサロンの常連となり、〈小楽節〉に守護されての「毎日のオデットとの逢いびき」(I. 226) が始まるのだが、まさに「日々の彼女の現前」がこうして習慣として揺ぎなく確立した時に、彼女の不在という事件が勃発するのだ。彼が見つからぬ彼女を求めて、御者にいう「是非ともその婦人に会わねばならない。それは最高度に重要なことだ」(I. 230) という体裁を考えた表現が、意外にも彼の胸の内を、二人の関係をよく表現している。この時「彼は、他の人間を所有しようとする常に不可能な欲望を抱きはじめる」(I. 364)。不可能だから「苦悩にみちた無分別な欲求」となるこの欲求を持たせることが、「あらゆる愛の生産様式のうちで (……) 最も効果的なものの一つ」(I. 230) なのである。それからは「毎晩」彼女と一緒に帰るか、それが出来ない時は夜家に立ちよる。それによって彼女に会う習慣がさらに「抜きがた」くなったところで (son habitude invétérée, I. 307)、スワンはヴェ

ルデュラン家から追放され、一方で彼女の態度も次第につれなくなり、会うのを断ったり延期したりする。こっちから「会う習慣を捨てよう」とするが (se deshabituier de la voir, I. 306)、彼の愛がもともと相手の不在や会うことの拒否に胚胎していた以上、彼女のつれなさは火に油をそそいでも、愛を断念する契機とはなりえないだろう。

この習慣の威力は話者においても同じであった。そして話者の習慣が具体的には母と会って接吻してもらう、あるいは夜母をそばに引きとめておく習慣のことであったのに対して、スワンのそれも、夜毎愛する女性と会うという基本的に変らない構造を持っている。ただそこには母という言葉は使われていないが、これも母幻想の反映と考えれば、自分の好みでない女性に毎晩会うというやや不自然な習慣も納得できるのではないだろうか。母親となら毎晩会ってもおかしくないし、幼児にとって彼女は美醜を超越して深い愛着の絆であるだろうから。オデットが「最初の頃」スワンを愛し、接吻を雨あられと降らせた (I. 238) のも、この観点からより自然に理解できるように思われる。サン・トウベル侯爵夫人邸ではからずも演奏に接した『ソナタ』は、スワンにしきりにかっつての「私が幸福だった時代」、「私が愛されていた時代」(I. 345) を呼びさます。このスワンが愛されていた最初の頃、とは幼児期の幸福な母子一体の楽園の時代をひそかに語っているのではないだろうか。それは、話者が最初に愛した花である山査子について、それを見ると今でも幸せになるのは「別の時代の愛でそれを愛したからだ」(新 I. 854) と語るその別の時代や、この感情の「起源が識別できない」、はるかな漠然とした「祝福された時代」(新 I. 861) に対応するのではないだろうか。最初の頃彼女はよく「でも私はいつでもあなたに会えるわ。私の方はいつでも時間があるよ」(I. 346) といっていたが、これは育児に当って母親が子に対してとる基本的態度のように思われる。さらに「夜昼どんな時間であっても私が必要なら、合図して下さいね。私の人生を好きなようにお使い下さいね」(I. 321) とまでいうのだが、子にとって母親とはまさに一時こんな状態で出現するに違いないのだ。たしかに母

は子に、オデットが彼に払ったのと同じ「関心、興奇心」を抱くだろうし、時にはいやがる子の迷惑も顧ず、「私のたからもの」(I. 319) に対して「特別な恩寵によって彼の生活に入りこませて欲しいと熱心に」頼むだろう(II. 346)。その頃は「毎日お会いする習慣ができたらどんなにいいか」と夢見ていたのは彼女の方だった。しかしスワンは、まだ母の第二の拒否によって母子一体の楽園を追放されていない幼児の傲慢さで、そういう彼女をむしろうるさがつていたのである。しかしついにそんな彼女の存在が「苦痛にみちたやみがたい欲求」になった時、追放が始まるのである。³⁶⁾

スワンの愛は、それ自体としてではないにしても、しかし話者の愛を媒介してみると、相当に強く母幻想の負荷を帯びているように思われる。すると彼の〈小楽節〉の経験、あの「特殊な快楽」とは何だったのだろうか。

『スワンの愛』冒頭から読んでみると、この楽節との邂逅はいわば彼のドン・ジュアンの女性遍歴の一齣をなしていることに気がつく。執拗な女性追求の最中に識りあったオデットが導き入れたサロンで、〈楽節Ⅱ彼女〉(elle la colle...) と「再会する」のだが、前年初めて聴いた時スワンは「特殊な快楽」^{ボリゴラテ}をもたらした〈それⅡ彼女^{ユル}〉^{ユル}にすでに「未知の愛のようなもの」(II. 210)を感じていた。自分がどういう経緯で「この小楽節への恋に落ちたのか」(II. 213)をオデットに語ってもいる。ではこの愛も母幻想が影を涵しているのではないかという推測が浮かんでくる。その一節がオデットへの子の愛と緊密な関係にあったことはもはや繰返すまでもないが、さらにそれ自体としても、話者Ⅱスワンの母幻想的症状のいくつかをちらつかせているのである。まず不在におけるもう一度、会う欲求が楽節に向けられる。最初に聴いた時、「かれは〈それⅡ彼女〉^{ユル}」にもう一度会うことを熱烈に願った(II. 210)、しかし「通りすがりの女」のように「すでに愛しているのに名前さえ知らない〈それⅡその女性〉[elle]と、いつかもう一度会えるのかさえ」彼には判らないのである (ibid.)。話者Ⅱスワンの女性への最終的欲求であった安

ら、ぎもここには欠けていない。「〔楽節Ⅱ彼女〕[elle]は安らぎをもたらしながら通りすぎていった……」(elle passait ... apaisante, I. 348)。となるとその「調和がとれた逃げ去る肉体に接吻しよう」と唇を突きだすのも (ibid.)、
 〈母〉への接吻の要求と無関係ではないだろうし、それが「匂いや愛撫のように彼を囲み包みこむ」(I. 349)のも、
 単なる女性というより母親的な特性の一端(匂い、愛撫、包みこむ⁽³⁷⁾)を垣間見せているように思われる。つまり話者の道すじを通して辿りついた地点に、我々はスワンの経験を通して導かれることになるのではないか。スワンと話者がともに〈小楽節〉にあれば心を捉えられたのは、一方では二人の愛に母幻想が共通しており、他方では
 〈小楽節〉が母幻想の表現そのものだったからではないのか。それはひいてはヴァントゥイユの娘への愛が、やはり母への子の愛に他ならなかったことをも暗示するだろう。

スワンの〈小楽節〉への愛が母幻想の影を帯びているなら、彼がその曲を聴いた時、数年来放置していたフェルメール研究 [I. 198] に再び着手する [I. 240] のもしかるべき理由があつてのことではないのか。この画家の名前は、Ph. ボワイエの指摘するように⁽³⁸⁾ Vers Meie すなわち「母の方へ」を含意したものであり、ブルーストがなぜか Vermeer ではなく Ver Meer と分ち書きにするのもそれに関係があるのかもしれない。簡単にいえばスワンは小楽節Ⅱ〈母〉を聴くことで、フェルメール研究すなわち「母の方へ」歩みはじめたわけである。だがそう考えると少々混みあった問題が生じる。彼にとってそれぞれ母幻想を体現していたオデットと〈小楽節〉が、後者が前者との恋の讃歌であつた最初の頃には一致していたのだが、彼女の態度がつかなくなるにつれてそうではなくなる。サン＝トゥヴェルト夫人邸で出現した〈小楽節〉は、オデットともまた彼女への愛とも微妙にずれて、「彼の愛の守護女神」「彼らの喜びの証人」となるだけではなく、今や「この喜びの脆さ」を警告し、また彼がいつの日か「そこから解放されると期待してもいいない」愛の悲しみについて、「そんなものが一体何なの？ 何でもありやしないわ」

と「苦悩のむなしさ」を悟しきかせる。同じ母幻想にかかわりながらオデットと〈小楽節〉は重なり合うものではなく、ここにいわば二人の〈母〉の存在を仮定しなければならなくなる。その分裂はフェルメールに關しても起る。オデットは恋人の画家研究を奨励するような言葉を吐く（「……」）びしびし仕事をさせますからね（I, 298）。その限りで二つの母幻想は方向において一致する。ところがオデットへの不安な欲求に苦しむスワンは彼女のいるパリを離れられず、そのために折角再開した画家研究に必要な調査旅行へと出発することがとうとうできない。ここでは両者は対立し、二者択一的な關係にある。しかしそれは最初からそうだったのである。一方でオデットは最初の頃、フェルメールを「あなたが私に会うのを邪魔する画家」（I, 198）と呼んでいたし、時折彼の家を訪れる彼女はそれによって「彼の夢想や例のフェルメール研究を中断」（I, 240）させていた。實際、オデットとの結婚は彼に画家研究と縁を切らせることになる。彼女は「この人は私にいい寄っていた頃、この画家のことで頭が一杯だったのよ」とそれを昔ばなしとして披露する（I, 534）⁸⁹。

同じ母幻想でもその追求の仕方によって互いに相容れない二つの世界が絡まりあっており、話者が作家になる行程を見通すにはその關係を解きほぐさねばならないだろう。

一〇 死女への愛

愛が『失われた時』においていかに支配的な主題であり、かつ、とりわけ話者においてそれが母幻想にいかん深く根差しているかを見てきた。それは彼の愛をたえず不安と苦悩に陥れていた。生存上不安定な状態で全面的に依存している〈母〉を失うのではないかという子の切実な不安と、〈母〉のいない世界にひとり投げだされて脅える子の苦悩が彼の愛を構成していたといってもよい。ところがこの宿命的な不安と苦悩が一時的に已んで至福の瞬間

がやってくる。話者は嫉妬から逃れようとアルベルチヌを監禁したが、彼女は内側から逃げ去る女であることをやめなかった。真に彼女を所有することなど可能なのだろうか。しかしそんな同棲生活に恩寵の時が訪れ、話者は心行くまで安らぎに満ちる。それは彼女が眠りに陥ったほんのひとときにやってくるのである。

私は彼女の眠りを眺めている時ほど心地よい夜をすごしたことは一度もなかった。(III. 71)

眠りにおいて人は意識を失う。その人間はそこにいながら、そこにいないわけだ。にも拘らず彼にとって眠りは、愛するものを隔てる障壁とはならない。「彼女の眠りは彼女を私から分離さなかった」(III. 114)。それどころか「愛の可能性」とは、コミュニケーション通路の絶たれた状態、多分この状態においてのみ、実現しうるものとなるのだ(III. 70)。一言でいえば、それは彼女がその時だけ内的にも逃げ去る存在であることをやめるからである。「彼女の自我は口に出さない考えやまなざしという逃げ口から(……)たえず逃れでるのをやめて(……)、その肉体のなかに避難し、閉じこもり凝縮されていた」(III. 70)。あるいはその寝息のなかに「美しい囚われの女の全人格、全生活が集約されて、私の眼の下に横たわっている」(III. 71)。彼は視線によって彼女を支配している。その唇に接吻すれば彼女の生が彼の舌に伝わってくる(III. 74)。彼をあれほど苦しめた所有の不可能性が、こうして解消されている。「私は両腕にかかえた彼女を眺めながら、彼女が目覚めている時には経験したことのない彼女を全的に所有する(*la posséder tout entière*)という印象」を味わう(新 III. 578, cf. III. 73)。「嫉妬も鎮め」られる(III. 113)。眠っている彼女に添寝すれば、「毎晩アルベルチヌを自分のそばに置いておきたいという欲求」(III. 77)も充たされ、安らぎ(*calme apaisant*, III. 73)がもたらされる。話者が、コンプレのはるかな夜における母の接吻以来ついで覚えのない安らぎを味わったというのは、実はこの眠れるアルベルチヌの傍らにおいてなのである。

〔III. 77〕。こうして彼は「下心に煩わされる」ことのない心安らぐ愛」〔III. 73〕に酔ひ、さらにそれは「純粋な愛」(un pur amour, III. 115) とまでいわれるだろう。

アルベルチーヌを監禁するまで話者を追いつめた母子一体への不安な欲求が、彼女の眠りにおいて初めて存分に叶えられる。眠りは一種の内的監禁というべきものだろう。だがそれにしても、人間としての交流が絶たれた逆説的状况ではじめて、しかも純粹に味わえる愛とは一体何なのか？ 話者はつねづねアルベルチーヌとの amour non partage に苦しんできたが、眠った彼女との間に成立する純粹な愛の至福感、むしろこれが彼にとつて唯一可能な愛のかたちではなかったのかという疑惑を抱かせる。愛の喜びを愛する女性と分かちあう代りに、相手の参加を拒否して話者が耽る利己的で孤独な愛の作業は、amour non partage の裏面ではないだろうか。自分から離れる(母)を取逃がすまいとする子の専制君主的愛は、相手の自由の剝奪をめざすが、監禁によつても果たせなかったこの願望を実現させることは相手を無限に死へ近づける努力にひとしいという見解はすでに述べた。眠れる女の傍らで、一方通行的、自慰的な愛のいとなみに耽る時、そこで意志も自由も完全に奪われて横たわり、相手のなすがままになる彼女は、生きながら実は死んでいるのではないだろうか。話者が享受する彼女の全的な所有は、相手が生きてゐる限りは不可能なはずである。「彼女が眠るのを見る喜び」〔III. 74〕とは死女を愛する喜びに発しているのではない。眠れる女を享受する話者が、そういうえば彼女を草の茎、木、無生物、風景、時を刻みつつける時計などへとことさらに物化する傾向が窺われるのは〔III. 70〕、そういう欲望をおのずから語るもののように読める。いや他のところでは、アルベルチーヌみずから私は寝つきがよくて「死者のようだ」と語り、話者も「なるほど彼女の部屋に入った私が目にしたのは一人の死女であった」(Ce fut une morte en effet que je vis ..., III. 359) と応じて、彼女の眠りにおける死の様相を一層強めている。さらに、彼女の寝ている「屍衣のような」掛布はその襲とともに

「石のように硬直し」、当の彼女はまるで、最後の審判を表わす中世の浮彫りで墓石から首を出して大天使のトラペットが鳴るのを待つ死者のようだったとも付け加えられるのだ〔ibid.〕。

ネクロフィリアとはまずなにより、女性を完全に支配しようとする、きわめて一般的な欲望に根差した愛のかたちであると思われる。過度の支配欲が相手のなんらかの抵抗に出会った時、そこに生じる葛藤を自分本位に、そしてもはや相手の抵抗の余地が生じないほどに解決した愛の関係である。したがって、墓を発いて新仏を恥ずかしめるといった凄惨な伝説的光景とばかり関係があるわけでも、エドガー・A・ポーのように酸鼻をさわめた死女との恋といういかにもそれらしい姿で文学に登場してくるわけでもない。それは父権的な社会では男が女性への暴行などにおいて実現させているはずの欲望と全く違ったものではないだろう。なお詳しい分析をする暇はないが、ヨーロッパに多い『いばら姫』や『眠れる森の美女』型の民話において、王子が長い間眠りこんでいる王女に接吻する場面にもおそらくその欲望は影を落としている。長い——時には百年前からの——眠りとは死以外のなにものでもないだろう。『白雪姫』では実際に毒殺されて棺に横たわっているところを、美しさに打たれた王子が抱擁している。同系列のイタリアの民話では、若くして死んだ王女が窓と入り口を壁で塗りこめた城の中に安置されているが、この閉ざされた建物とは墓ではあるまいか。長い年月がたったある日そこへどうにかして入りこんだ王子が、王女の美しさに打たれて彼女を愛するようになる、そして「この若い王さまの愛があまりに深かったので、男女の双子が生れた」とさえ語られる⁽⁴⁰⁾。

話者が眠れるアルベルチーナの傍らで感じた喜びは、この王子と同じ衝動をみたすものではなかっただろうか。彼は「彼女の眠りがもっと深くなると彼女に触れ抱擁する」(III, 70)のだが、それでも彼女は目を覚まさない。そこで「倦くことのない新鮮な快楽」を思いのままに味わいながら〔grat.〕、頬や胸に接吻し、「身体 of あらゆる部

分」を愛撫し、足を絡ませて、彼女の呼吸の軽い規則的な動きに身を任せて、「私はアルベルチヌの眠りに船出するのだった」[III. 72]。その寝息は「快樂のあえき」のようにも聞こえ、話者はまるで楽器のように彼女の身体から「さまざまな音色」をひきだす。こうして「私の快樂が頂点に達した時も」、彼女の眠りは破られないのである[III. 73]。彼女の「深い眠り」とは、民話が長い眠りとして語る死の眠りに近いのではないか。そしてまさに「そういう瞬間に、私は彼女を押し黙った自然界の、意識も抵抗もない事物であるかのように、より完全に所有したのだという気がするのだった」[ibid.]、ここにネクロフィリアの幻想はきわめて濃く浮かびあがっている。

そういえばもう、一人のアルベルチヌも、同じ欲望の犠牲になっていた。話者は例の *phrases d'opées* に関して、バルベール・ドルヴィイでそれに該当するのは「隠された、しかし物質的な痕跡が暴露するある現実」だと規定して、幾つか長篇小説を例として挙げたなかに、一つだけ『真紅のカーテン』という短篇小説に言及している。そこでは手が隠された現実を暴く痕跡なのだという[III. 375]。短篇集『悪魔のような女たち』(*Les diaboliques*)の初めに置かれたこの作品は、駐屯地の町に下宿住まいをする若い将校と家主の老夫婦の娘とのやや奇妙な愛の物語である。将校の若者はある時突然夜中に部屋まで忍んでくるようになった娘と痴情のかぎりをつくして激しく愛しあうのだが、半年ほど経ったある晩彼女は悶絶したまま頓死する。不祥事の発覚をおそれた男は町を逃げだす。話者の指摘した手とは、最初は一月間ほど毎日同じ食卓に向かいながら両親の手前一言も口をきかず、両親とは似ても似つかぬオーストリア公女のような冷やかな態度に終始していた娘のアルベルトが、ある晩食事で珍らしく隣合わせに座った時、いきなり差しのべた手を指しているのだろう。「一本の手が大胆にもテーブルの下で私の手を握った」。若者はその手の「常軌を逸した激情の有無をいわせぬ力」に、「いうにいいない官能の喜びに身が蕩けていく」ような印象さえうける。その手は、一見冷やかで非情にみえた少女のなかに、秘かに吹きあれる愛慾の嵐を「物質的

痕跡」として示しているというわけだろう。隠蔽の問題は次章で扱うことにして、二人の夜の愛はそれを引用した話者の愛と無関係ではなかったように思われる。というのも娘のアルベルトは最後になって頓死するのではなく、おそらく最初から死んだ女性として登場しているのだ。冷やかな表情に鎧われた、感情の片鱗も示さないこの不可解な少女は、生きている時から「メダルに刻んだような硬ばったかたくなな顔付き」(immobilité et la fermeté d'une médaille, p. 82)⁽⁴⁾の持主である。その彼女が自分から手を握り足を押しつけ、やがて部屋に忍んでくるようになる。だからこの最初の逢いびきの晩、当然若者は前々から驚かされていた彼女の「説明しがたい冷たさ」は何なのかと当人に尋ねるだろう。しかし彼女は「一言も口をきかない」のである。「彼女は決して長い抱擁によってしか〔それに〕答えなかった。彼女の悲しい唇は、接吻する他はまったく押し黙ったままだった」(p. 82)。彼女は「内部では熱く燃えている部厚く堅い大理石の蓋」に比較される。そんなある夜、裸足で忍んでくるために冷えきった彼女の足をいつものように温めようとするが、突然抱きしめるその腕から力が抜け、足の冷たさは彼女の唇までのぼり、やがてその身体を「おそろしい硬直」が捉える。だが彼女はこの時はじめて死んだのだろうか。大理石のように冷やかで自分の感情を言葉で表現できないこの女性は、すでに生きながら死んでいて、表情、言葉、感情などから始まり愛の心臓部へと至る長い死の過程の最終点にその時ようやく到着したにすぎないのではないか。最初に部屋にきた時の彼女がこの世ならぬ亡霊 (la vision la plus surnaturelle, p. 81) にすでにたとえられていたことも付け加えておこう。世間にも両親にもひた隠しにされたこの夜だけの無言の愛は、そういう意味で死女とのネクロフィリア的愛であり、『失われた時』のもう一人のアルベルチヌ(というのも、それは『深紅のカーテン』のアルベルトの正式な洗礼名でもあるから)との愛と深部で交差している。もっとも昼間は自分を殺して、眠るまでもなく死んでいる、ただ愛のためだけに夜目覚めるこちらのアルベルチヌは、話者からみれば監禁までして所有しよう

とした少女に比べて理想に近い愛の奴隷であつただろう。

しかし彼女はなぜ冷やかな態度をとらざるをえなかつたのか。つまりなぜ半ば死んでいたのか。おそらくそれは両親への畏怖の念からである、というよりこの穏やかで善良な老夫婦がそれとなく体現する、愛を許容しない潔癖な貞操観に呪縛されてである。そのことは、彼女がはじめて忍んでくる時「静まりかえつた家」で音をたてはしないかと恐怖——それも「相当に激しいはず」の——に捉われたらしく、ようやく男の胸にとびこんだ様子はまるで「追われている娘」のようだった(p. 8)と述べているところに暗黙のうちに語られている。家内の静寂は、物音をたてることを許さない厳格な道徳観を、あるいはどんな物音も逃がすまいと聞き耳を立てている社会の——父権的な——掟の存在を感じさせる。彼女は誰に追われているのか。彼女を追いかけていたものが、いわば表情や態度からはじめて徐々に彼女を殺害していった当の犯人である。興味深いことに彼女が若者の部屋までくるには、「彼女の父と母が眠っている部屋を横切らねばならない」(p. 83)。しかもこの部屋は軋み音を立てる。つまり部屋の配置構造自体が愛を禁じており、それに違反して父母の部屋を横切つても、罪が番犬のように軋み音を立てて犯された罪を暴きたてようという仕組みだ。この掟による抑圧は少女の表情を殺し、自己を語る言葉を剝奪し、ついに彼女の生は内奥に追いこまれてそこで辛うじて余燼を保つものの、それにはもはや言葉なき身体のかげである愛による自己表現しか残されておらず、それだけにその進りは熾烈にならざるをえなかつた。なお「腰を締めつけた」彼女の白衣も、父権的な貞操観を要求したいわゆるヴィクトリア時代の道徳を反映しているように思われる。この——婦人の足首がちらりと覗くことさえ許容せず、椅子の脚さえ羞恥心を傷つけるからというので覆い隠したという——⁽⁴²⁾道徳は、『ボヴァリイ夫人』『悪の華』に続いてこの『悪魔のような女たち』(一八七四年出版)をも検閲の槍玉にあげ、たちまち発禁処分にしてしまったのか、この厳格さは、『失われた時』で母にもう一度会おう

と決心した話者が厳しい罰を覚悟していた家庭の雰囲氣と相通じているのではないだろうか。

ところでアルベルチーナが眠りに落ちると、「もはや私は彼女に見られていないので、自我の表面で生きる必要がもはやなくな」という [III. 70]。彼女の眠りは彼女を完全に所有しうる事物ものに変えるだけでなく、彼女を見ている話者をも変貌させる。「閉じた眼」の前で、普段の人格の背後から自我の深層が立ち現われてくる。それが死女を愛そうとするのだ。一種の視線恐怖というのか、彼女の眼は彼が内奥の欲望をさらけだすのを許さないのではないのか。それは逆に禁じられた欲望の所在をさし示している。傍らに眠る女が〈母〉であつたことをここで念頭に蘇らせておこう。

『失われた時』では話者のこととして母子相姦やそれへの禁忌の念が正面きつて語られることは多分一度もない。コンブレの夜に少年が甘美さと同時に感じる取返しをつかないことをしたという悔恨の念や「悪はなされた」という罪悪感の表明されるものの、まるで用心深く尻尾を掴まれまいとしているかのように、具体的にそれが何をいうとするのかは曖昧なままである。間接的比喩的表現なら探せばいくらかでも見付かりそうだが、表立った直接的表現は拭いたように見当たらない。あの夜母は『フランソワ・ル・シャンピ』を朗読する時、「愛の場面は全部とばし読みした」[I. 42]ので、話者には作品の主題が不可解なものになってしまふ。この愛の場面が、結婚にまで至る母と子の愛であることはいうまでもないが、『失われた時』でも母子相姦やその禁忌は削除ではないにしても表面的レベルから省筆ないし抑圧されてしまったのではないか。父と子のエディプス的対立は、家庭の厳格な雰囲氣や父の横暴さにそれとなく窺えるのだが、あの夜父が氣粉れに母を病氣の子に譲つてからはそれもあまり問題にならなくなる。ところが周知のように『ジャン・サントウイユ』では、母への子の愛もそれを禁止する父との対立も比較的率直に表現されている。両親と喧嘩した後、ジャンは母が以前着ていた外套を見つけたして手に取るの

だが、その外套はまるで「兵士に髪を掴まれた少女」のようだとことさら「強姦」のイメージをこめて描きだされる。「……彼はそれを鼻に近づけ、そのビロードの服地が手の下で溶けるのを感じ、母を抱きしめているような気持ちになった」〔419〕。子の欲望の性質は明白である。やがてジャンがそれを羽織って、そのバラ色（女性の欲望の色）の格子の裏地をちらつかせながら食堂に現われると、父は「みつともないよ、ここは暑いんだから。それに母さんのものじゃないか。すぐそれを脱ぐんだ」と、おそらくは苛立った声で命令する。エディプ斯的三角形の確執がここにはつきり見てとれる。あるいはジャンが明け方家に戻って床に就くと、隣の寝室に入る母の衣ずれの音を聞いて神経が立って眠れなくなり、そんな日は「父を殴りつけたいという口に出せない願望」が粉らせないほど強くなると、父殺しの底意を覗かせている〔859〕。ジャンは母の愛情において父につぐ第二の権利を持っており、父がいない時は食事の献立も息子の好みに合わせられ〔856〕、食事中は「彼の母に向いあつて一家の主人として坐る」〔857〕ことになる。ところでこのエディプ斯的葛藤の文脈の中に、まさにあの眠れる女の場合が置かれていたのである。夜帰宅したジャンは、私は寝つきがいいから起こしても気にしないでやすみをいいに部屋に寄りなさいと母が書き残したのを読んで、寝室に行く。「サントウイユ夫人は、夫の眼を覚まさせるのを危惧して、夜は絶対にジャンを寝室に入れなかった」というのだから、その晩夫は不在だったわけだろうし、さらには夫人が家族内のエディプ斯的葛藤をはっきり意識していたこともそこに窺える。戸を少しあけると、母の「美しく重々しい横顔、解かした髪、閉じた眼」が見える。彼は眼を覚まさせないように靴を脱ぎ「そつとベッドまで行くと、彼女が顎まで覆っている（……）上等の掛布に接吻し、それでも眼を覚まさないのを見ると髪にも接吻した」。すると母は身動きし、なにか呟くので、一瞬ジャンは「ぎくつとして後退りした」〔U... se recula effrayé, 855〕。なにを彼は恐れたのか。それは『真紅のカーテン』のアルベルトが下宿人の部屋に忍んでくる時に物音をたてて慄いたの

に通じる。禁忌の侵犯が意識されているからである。たとえば、フランソワ・ル・シャンピが母マドレーヌへの接吻はもう子供じやないから止めましようとか当人に拒否された年齢をとうに過ぎた青年が、父が不在の夜に呼ばれた寝室でおそるおそる眠る母にした接吻は潔白ではありえないことを、ジャンは承知していたに違いない。もつとも母は再び安らかな規則正しい寝息を立てるので、ほっとする反面、「失望に近いものを感じた」というのは何を期待していたのだろうか。その後彼は、母が使用人への伝言として、明日はお昼まで息子の部屋にいるつもりだから彼の眼が覚めたらすぐ私を呼ぶようにと指示しているのを読んで、「これから眠っている間も母が身近にいるのを感じ」、その晩一人で眠るのが恐くなったと述べる〔ibid.〕。ジャンが話者と同じ「夜の不安」という重荷を背負っていたことが判る。というよりこの母の眠りは、ざっと見たところ、寝付きの良さ、眠っている間の身動き、寢言、安らかな寝息、接吻、目覚ませない配慮といった点において、アルベルチーナの眠りの下絵になっていたのではないかと思われる。ジャンがあえて母の髪に接吻できたのはその目が閉じていたからこそだと考えれば、それはそのまま話者がアルベルチーナという〈母〉に添寝して喜びを味わうことを可能にした理由でもあったのではないか。アルベルチーナの眠りは女性支配の極点ともいべきネクロフィリア的欲望を成就させるばかりではなく、閉じた眼の一時的な禁忌の解除によって母子相姦的欲望をも同時に顕在化させていたと思われる。

ここで思いあわされるのは、話者がかつて売春宿の女主人にした贈り物のことである。彼はレオニ叔母から相続した何点かの家具、「とりわけ大きなソファア」を彼女に与えるのだが、娼婦たちがそれを使っているのを眼の当りにして、身を守るすべもないものをむりやり残酷な「接触」に委ねてしまったと後悔する〔I, 578〕。レオニ叔母は、母コンプレクスの濃厚なマドレーヌと紅茶の味がまず第一に想起させる女性であり、血縁関係からいっても母的性格をおびていたように思われる。そういう女性から貰った家具を、置き場所がないからといって、よりによつ

て売春宿で使わせる必要などあったろうか。この選択は死んだ（母）への欲望を逆に照らしだしているように思われるのだ。話者が後悔の念を、「たとえ死女を犯させたとしても、これほど苦しみはしなかったろう」（J'aurais fait violer une morte ... ibid.）といっているのはいわゆる語るに落ちるのたぐいである。この死女とは誰なのか。まず、家具の前の持主であった叔母であろう。しかしその後で、家具の中に「死者の魂が閉じこめられ、苦難に耐えて解放を乞い求める」というあのケルト信仰と同じ輪廻転生観が述べられる。死女はこの点からも、ヴァントウイユの交霊術が呼びよせようとした女性と同じく推定に導かれる。さらにそれではいい足りないかのように話者はある愛の挿話を付け加える。彼が「はじめて愛の快楽を知った」のは「その同じソファアの上で」、従妹の一人とであったという思い出である。しかもその従妹は場所に困った話者に「レオニ叔母が起きている一時間を利用しようという、かなり危険な忠告」をしたのだという（ibid.）。ソファアの冒瀆ははじめてのことではなく、かつそれが近親者との愛だったという点も注目に値するが、愛の場所としてのソファアがどうやらあまり起きあがることのない病弱なレオニ叔母の部屋におかれていたことは、話者の禁じられた愛への欲望を改めて示唆する。叔母の死後そのソファアを売春宿で娼婦に使わせて、「たとえ死女を犯させても……」と述べる話者の後悔の向こうには、やはり母へのネクロフィリア的願望がかなりはつきりと焦点を結んでいたように思われる。眠る母の髪への接吻は、その眠りがアルベルチヌのように深い眠りであればやはり彼女にしたようにもっと大胆に愛撫し抱きしめる段階へと、「びくくとする」危惧もなく移行しえたのではないだろうか。叔母のソファアの娼家への贈与はそういう欲望が彼のなかにあったからこそのように思われる。そのためには母の眠りがより確実に永く続けばよいわけである。ということはこの点からも愛される女性性は死を願われることになるのではないか。

禁忌の愛はそれがとりわけ母子の愛である時、そして文学が支配者の自己表現となるかぎりでは、それを禁止す

る法による処罰としての死の世界へしばしば連れこんでいた。『オイディプス王』の王妃イオカステ、『フェードル』のイポリットとフェードルというふうに。『パルムの僧院』『赤と黒』における主人公たちの死もそうだったろうし、ワグナー『トリスタンとイゾルデ』では、愛はまさに死においてのみ成就しうることを牧笛が奏で聞かせていた。ヴァントウイユの〈小楽節〉は、この牧笛による〈死と愛〉の楽節に重ね合わせられると同時に、やはり『トリスタン』との類似を述べた一節で、その愛の特殊性が『ルネ』のそれに対応することが示唆されていた。この対応については近親相姦の観点からすでに論及したが（三章）、このシャトーブリアンの短篇小説の愛が、これもやはり死と密接な関係にあることをここで指摘しておこう。この作品は全体に、たえずどこから弔鐘が聞こえてくる。

ルネはトリスタンのように誕生によって母を産褥の床で死なせ、後には父もその後を追う。彼は墓場の散歩を好み、この世に嫌悪しか抱かない。父の死後、修道院生活を考える姉メアリーと別れて旅行に出るが、その目的も古代ローマ・ギリシャの「今は亡き人々を訪れ」、古代都市の廃墟という死の国で世の無常観に深く浸るためであって、少年時代の墓場の散歩の続きにすぎない。しかも戻れば戻ったで今度は片隅の田舎家に隠棲する、つまり「わが身を埋葬する」(m'ensevelir, p. 56)⁽⁴⁵⁾。つまり彼は出生以来たえず死の国から死の国へと彷徨を続けてきたことになる。

彼はそこになにを、あるいは誰を探していたのだろうか？ その答はさしあたりは、世間に背を向けて生きながら、その一方で次第に強くなってくる女性への愛のなかに輪郭を表わしてくるだろう。「神よ、あなたが私の欲望に叶う女をお与えになっていたら……！」(p. 60)。欲望に叶う女とは誰なのか？ それは曲折を経ながら次第に姉メアリーへと、無意識が意識化されるように集束していく。姉の母的性格はすでに述べた。近親相姦を避けようとして姉は弟に結婚をすすめる自らは修道女になる決意をかためる。しかし、その去りぎわに彼女が残した手紙は、「愛しい、あまりにも愛しいルネよ、こうして限りある世であなたから身を引離すのも、永遠のなかではあなたと別れ

わかれにならないためののだ」と永遠の愛を語り、さらに「いつの日か同じ墓が私たち二人を結びつけますように！」という死後の恋を露骨に仄めかす表現もみられる。そしてそれはほぼその通りに実現されるだろう。やがてルネは、姉が修道女になるための教会の儀式に招待されるが、それはどうやらキリストと処女の結婚式、つまり神に処女を人身御供として捧げる一種の供儀サクリフィスのようであるが、その式次第には俗世との別離を示す志願者の象徴的な死の儀礼が含まれている。いわば死の結婚式である。ただし相手のキリストには身替りが立てられるであろう。姉は墓としての大理石に横たえられ、経帷子をかけられると、死者の祈りが唱えられる。しかし側で膝まづく弟の耳は、神に自分の罪深い愛を告白する姉の呟きを聞いてしまうのだ。それによって初めて姉の「秘密」、とりも直さず自分の心の「秘密」に目を開かれたルネは、その上に身を投げかけ「腕の中に姉を抱きしめて」叫ぶ、「イエス・キリストの汚れなき妻よ、死の水を通して私の最後の抱擁を受けて下さい！」[p. 173-4]。その後程経ずして姉はこの世を去り、ルネも一緒に死にたいと思うものの自殺の大罪をおそれて、アメリカに渡りその地で戦死をとげる。こうして彼は死後永遠に姉と結ばれる。おそらくそうすることによってのみ彼は、若い時から死の国をめぐりつつ探していたもの、産褥で死にわかれた〈母〉にめぐり会うことができたのではないか。その契りが教会でかわされるのだが、しかしそれにしても世にも罪深い近親の、いや母子相姦の結婚式がところもあるうに教会で、それもイエス・キリストをだしにして行われたことになるが、それは人をくった戦略というより、宗教的權威をアリバイにしなければとても成立しないための苦肉の策というべきなのだろう。『失われた時』における宗教的イメージの頻繁な援用もその点から考察する必要があると思われるが、ここではそれと絡んで死がさらに決定的な意味を持つていたことに留意したい。宗教よりも強く死は、この世に俗界の掟の効力を失わせ廃棄するからである。見ようによっては、神聖な儀式のただなかでキリストをさしおいて不埒にもその妻に手を出す瀆神とそれに輪をかけての近親相

姦の大罪が、姉の死を見取った聖職者によってあまり問題にされないのは、まさに彼女がそのまま病いにたおれて死ぬからである。教会での抱擁は「死の水を通して」行われたために、罪の汚れが払い清められ許容しうるものに變貌させられたのだ（ルネはその意味でも早晚死しなければならぬ）。こうした禁忌の愛は、首尾をとげるために、そして罪のアリバイとしてどうしても死の世界に縛れこまざるをえないのである。そしてそれは、『ルネ』『トリスタン』に通底するはずのヴァントウイユの〈小楽節〉を媒介にして、話者の愛への見通しをもつていているように思われる。

眠れるアルベルチーヌは、母幻想に根差した話者の不安な女性追求においてその頂点をなす至福の、しかし逆説的な愛の経験であった。眠りという死において、愛の可能性が見え、「純粹な愛」に達することができたのである。この情景はヴァントウイユの音楽にも描きこまれていたことを思いだそう。七重奏曲を聴きながら、アルベルチーヌへの自分の愛とこの曲との対応関係に思いを致した後、話者は彼女が作曲家の娘と会っていたのだらうかといっしか思いめぐらす内に、嫉妬の苦悩に陥る。そして彼女と別れる誘惑に屈しなかったのは幸いだと、家で自分を待ちながら「おそらくは一瞬部屋で眠りに落ちてしまったろう」彼女の姿を思い浮かべるのだが、その時彼の心は「七重奏曲の親密で家族的な優しい楽節（une tendre phrase familiale et domestique du septuor）に愛撫される」のを感じる（III. 253）。アルベルチーヌへの愛に関しても、*la douceur familiale et domestique*（III. 485）と同じ二つの形容詞が使われており、ともに家族のという意味だが結局は母と子の愛に関わるという見解はすでに述べた。しかしこの場合は、同じ家族でも母と子ではなく父と娘の関係が問題になる。その後につづく一節が示すように、「おそらく——それほどわれわれの内的生活においては全てが交錯し重なりあうので——それ〔楽節〕の楽想がヴァン

トウイユに与えられたのは彼の娘の眠りによって」だからである。もともと母と娘の対立は、これまで見てきたように決定的なものではなく、話者にとってアルベルチヌは同時に愛人、娘、姉妹、母であった。また一九〇七年の母殺しの評論（「親殺しに関する子としての感情」）で、ブルーストは母を殺した子の苦悩を思うと「私はもう一人の不幸な狂人、娘コーディリアの屍骸を抱くりア王のことが脳裏をよぎる」と、母殺しの子の苦しみを娘殺しの父の苦しみで説明していた。ヴァントウイユの娘の眠りは（母）の眠りと通じているのではないか。「それほどわれわれの内的生活においては全てが交錯し重なりあって」おり、だからこそ七重奏曲の「家族的な楽節」は（母）に嫉妬する話者の心を撫で、「鎮め」ることができたのだ。娘の眠りはかつて「静かな夜々、音楽家の仕事をその穏やかな幸せで包みこんだ」というが、包むを始めてそこには母的性格が感じられなくもない。すでに述べたように嫉妬の原因が愛する女性のゴモラ的關係にあることも共通しており、作曲家が眠る娘の傍らで味わう幸福は話者のものにきわめて近いといえるだろう。しかし話者のネクロフィリア的幻影まで作曲家が抱いていたとはテキストを読むかぎりではいえない。おそらくそこに共通しているのは、男が幼時に味わったはずの母子一体感の倒錯的な再現なのである。母と娘、父と息子はそれぞれいつでも逆転して結びつく。では性の隔壁をも越えて、母と息子、父と娘の關係も融通無碍に役割を変え、交錯し重なりあうのではないだろうか。アルベルチヌの眠りを見ながら、話者は自分が今度は母親になる。「このとても安らかな眠りは、子供の熟睡ぶりが（……）母親を喜ばせるように私を喜ばせた」（III.115）。この母は子供の目覚めにも眼を瞋る、「私はやはり母親のように、彼女がいつも上機嫌で目を覚ますのに驚嘆する」。それにつれてアルベルチヌも母から子に変わるのだが、それも単なる子（enfant）ではなく、話者自身が投影された子あるいは幼年期の話者そのものである。というのもこの子は話者と同じように「一人ぼっちでは眠らずに、眼を開けば傍らに誰かを見出す習慣」（bid）を持っていたらしいからだ。

すると話者がその役を演じて子の眠りを眺めている母 (une mère) も、話者の母ではないのだろうか。するとここに「眠れる女」のもう一つの相貌が浮かびあがる。それは話者がかつて母の胸で経験した母子一体の失われた楽園を、自分が母親を、といっても子の熟睡ふりをやさしく見守り、よく寝るからお利口さんだねと賞めさえる望ましい型の母親へと修正しつつ演じることで、再現した場面でもあるのだ、「アルベルチヌ、私の可愛い子よ」
〔III 253〕と。

「眠れる女」には多様な意味が交差している。しかしそのどれも最終的には母子愛の幻想に根差している。ヴァントウイユの「家族的な楽節」も話者の母幻想に対応する世界を表現しているのではないだろうか。

- 注
- (1) G. Bée, *Du temps perdu au temps retrouvé, Introduction à l'œuvre de Marcel Proust*, Paris, Bude, 1950, p. 150.
 - (2) *Ibid.* p. 153.
 - (3) M. Raimond, *Proust romancier*, Paris, Sedes, 1984, p. 123.
 - (4) J.-Y. Tadié, *Proust*, Paris, Belfond, p. 94.
 - (5) 最近発見され N. Mauriac によって刊行された *Albertine disparue* の第二の Version は、一部の研究者が主張するように作者の最後の意図を反映したものである可能性が高い。しかしそうだとするとそこで削除された三分の二の原稿の扱いと共に、後続の巻にもその構想や配置においてその細部において大鉦がふるわれた可能性が否定できなくなり、これまでの版に依拠していた読解の成立が危うくなるという難問に逢着する。かつて *Contre Sainte-Beuve* に課され、今もって大部分謎のまま残されている、それはどういうテキストだったのかというあまりにも根本的な問題が、今度は「失われた時を求めて」に即して解決されねばならないのだが、現在の資料ではその目算は立ちがたいように思われる。二つの立場がそこに生じるだろう。一つはいつか成しうるかもしれない、「消え去ったアルベルチヌ」のモリアック版に即した「失われた時」全体の復元作業が終了するまで読解を断念して草稿研究に従事する理想主義的立場。第二は従来のテキストに拠って、しかしその暫定的性格を考慮しつつも時には超構造的勇み足も辞さず、まがりなりにもブルースを読む実際の立場である。われわれとしては後者の立場を取るほかないが、ここでの読解がモリアック版の提起した意味を充分汲みとったというわけではない。
 - (6) Cahier 4, 13° (RTP, Bibliothèque de la Pléiade, vol. II, 1988, p. 1043. ただしこれは以下のように略記する、新 II 1043) 参照。もっとも

この段階では名前のない伯爵夫人が登場するが、それがちにゲルマント公爵夫人になることはほぼ間違いない。

- (7) 小間使いは草稿では「大支柱の一つ」を成していたとまでいわれている〔新 IV 710〕。話者は火傷した彼女と会って話をしたりする〔新 IV 710-735〕。

- (8) *Jean Santeuil*, Bibliothèque de la Pléiade, 1971, pp. 844-848.

- (9) G・ブレは「彼にとって世界は自転車乗り、ボーイ、市電の運転手、兵隊からなる心狂わせる全体をなしており、そのいずれも追跡の対象であり快楽の提供者なのである」と述べている〔*op. cit.*, p. 156〕。

- (10) *Op. cit.*, p. 156.

- (11) *Ibid.*, p. 165.

- (12) このテオドールの妹はゲルマント一族の先祖が建立したコンブレの教会のガイドを勤めていた。

- (13) *Op. cit.*, p. 159.

- (14) なおここで話者はさらに奇妙な愛を語る。それは少女を物色する基準に、アルベルチヌスのゴモラ趣味が入ってくることだ。「この娘なら彼女の気に入っただろう」〔III 553〕。彼女の欲望を介して彼の欲望が目覚める。ここには男女の同性愛者のモレルとアルベルチヌスの関係にみられるような性の複雑で奥深い問題が控えている。

- (15) ブレイアド新版では「次にくる愛、その愛の特殊性は、これまでのものを敷き写しにする」と一部変更がある〔新 IV 487〕。

- (16) "monde archétypique de Combray" [M. Butor, *Répertoire II*, Ed. de Minuit, 1964, p. 262]。

- (17) ガリアの地母神信仰については、井上泰男他著「中世ヨーロッパ女性誌」平凡社、1986、「ガリアの女たち」pp. 10-91を参照。

- (18) カミエ・コロの「泉のほとりの農婦」(1860の5)は若い女性が森外れの泉に髪を持って水を汲みに行く図柄、アングルの「泉」(1856)では裸婦が肩に水甕を口を下にして担ぎ、その口からは水がどうやら洒れることなく流れ落ちている。いずれも生命の水への信仰が背後にあるが、コンブレの *vivonne* 川も生命の川という意味がこめられている。

- (19) ジャン・ルーセ「ドン・ファン神話」、金光三郎訳、審美社、1988、p. 181。なおこれまでのブルースト研究で多少なりとも愛と母との関係にわれわれのような観点から着目したと思われるのはひとりブレがあるのみではないかと思われる。「愛とは誕生時に失われた楽園への悔恨である」〔*op. cit.*, p. 50〕。

- (20) この正面切った母子相姦の悲劇をアルベルチヌスという〈母〉に勧めたのは話者である。それも彼の欲望を語るものであろうか。だからそれで遅れたことが「不満なのでは全然ない」〔III 732〕。この悲劇の介在は、その観劇の後でようやく〈もう一度会う〉ことができた二人の関係の影の部分を示唆するだろう。

- (21) 母への子の不安が「友達への友情」に入りこむという指摘は、ブルーストの同性愛——そういわれている以上——を考える上で重要である。この点は稿を改めて論究したい。

- (22) アルベルチヌスが表向きは母でない以上、禁忌や悔恨はその限りで問題にならない。しかし前者は彼女の近づき難さ、所有の不可能性、後者

は彼女を殺したという罪悪感のうえにそれぞれのかたちで影を曳いているように思われる。

- (23) M・ヤコービ『楽園願望』(1930)、松代洋一訳、紀伊国屋書店、第一部参照。ヤコービはユング派の心理学者で主として文化人類学的知識を援用して乳幼児期における母子関係の重要性を主張するのだが、『*The primal scream*, 1970 (仏訳・*Le cri primal*, Flammarion, 1978)』の著者 A. Janov はさらに遡って胎児期へのその影響に着目して、神経症は患者が誕生する以前に、すでにその両親の精神状態によって決定されているという説を唱え、誕生以前と以降を通じて子供が両親のために陥る精神的地獄の様相をつぶさに描出・分析している。他に仏訳版として、『*L'angoisse et l'enfant*, Flammarion, 1980.』という著作もある。

- (24) 実際、アルベルチヌスが女性へのゴモラの趣味から、自分の意のままにならないことを、話者は隠れんばと呼んでいた。彼女が「私の掌中からいつともすると逃げてしまうこの隠れんば遊び……」(III 23)。

- (25) もっともブルーストの母ジャヌスが長男のマルセルに自ら授乳したのか、それも母乳だったかどうかは詳らかではない。しかし彼女が乳母を雇ったという記録は残っていないようである(「ペインター、R・ヘイマン、それに Bouguins 版収載の伝記を見るかぎり」)。

- (26) 類が選ばれた理由としては、性的ニュアンスが稀薄で母子が肉体的に接触するのに幼時からの習慣に立つ儀礼上の範囲をあまりこえないという事情も働いているのかもしれない。また、子を抱く母がこの部分同志をつけること(類すり)で、母子一体感を子に与えていた、そうした記憶の作用があるのかもしれない。

- (27) そういう見解をはっきり述べた文献としては、濫澤龍彦「ヴィーナス、処女にして娼婦」(『華やかな食物誌』、河出文庫所収)ぐらいいか思いつかない。

- (28) ここで母と子の近親相姦的結びつきに道を開くのが、母ではなく父であるということとは色々な問題を含むだろうが、なによりそれが犯された「悪」へのアリバイになっていることに注目したい。その晩母が朗読する『フランソワ・ル・シャンピ』でも、結びついてはならないはずの母と子が、周囲にスキヤンダル波風を立てずに、立てないどころかむしろやきもきする周囲のお節介で、愛し愛され祝福されて結婚するという結末に達するのだが、オイディプス王には到底真似のできないこの離れ業を無事なし遂げるために、ほとんど全篇に手品のような仕掛けが施してある、というより唯そのためにテクストが作られているのではないかとさえ疑われるほどだ。コンブレで、子の欲望に従うことに断然反対していた母が、母子相姦を蛇蝎のごとく忌みきらうはずの父の命令でやむなく節を曲げるかたちで一緒に夜を過ごすことになったのも、同工異曲の仕掛けではなかったらうか。

- (29) レオニ叔母やニッサン・ベルナルのようなヒポコンデリアの診断をただちに下すと、病因としての(母)が曖昧になるおそれがある。

- (30) この部分は一九八八年のブレイアド新版(新 III 854)とガルニエ・フラマリオン版(『*La Prisonnière*, éditée par J. Milly, 1984, p. 460)』に依拠した。『cette volonté de séparation que je simulais avec persévérance entraînait peu à peu pour moi quelque chose de la tristesse que j'aurais éprouvée si j'avais vraiment voulu quitter Albertine.』但しブレイアド旧版にもつれに対応する異文が掲載されている(III 351)。

- (31) 「カイエ 53」では、この自己放棄の相手がよりはっきり母に準えられている。「私はその人間に、母の膝に乗る子供と同じくらい全面的に自分を譲りわたしていた……」(新 III 1158)。

(32) 話者・スワン・ヴァントウイユの三人が嫉妬の苦痛を覚えるのは、愛する女性が男ではなく女に、対して、抱く欲望のせいである。少なくとも話者もスワンも相手のゴモラの趣味にはるかに強い苦痛を味わわれている。しかしその理由の解明は本論の枠を越えるように思われる。

(33) 母は作品内では死んでいないのだからやや暴言を吐くことになるかもしれないが、母体験の辿り直しはアルベルチヌの死まで含まれているのではない。だが母は本当に死んでいないのだろうか。アルベルチヌの死の悲しみにもモデルがあつたとすれば、一番初めに問題にすべきは、やはり母ではないかと思われるのだ。アルベルチヌとの同棲生活全体が多分そうであるように。

(34) バルベックにおける話者の花咲く少女たちとの愛が、「カイエ25」ではスワンの体験として三人称で展開されている。しかも数頁の空白を置いて同じ挿話が再び書かれるのだが、今度はいきなり物語が一人称で運ばれる。これは「失われた時」の私へそのままつながるように思われる [cf. M. Barthele, *Marcel Proust romancier, Les Sept couleurs*, 1971 t. I, p. 397-402, 及び新 II, 927, 944]。『カイエ22』(1910)では、スワンはオデットにシャルではなく、ジャンと呼ばれているが (新 I, 926, 946)、これはブレイアド新版の校訂者がいうように「ジャン・サントウイユ」の名前からきている (新 I, 1483)。未完の長篇小説の主人公がやがて「失われた時」の話者を構成する要素となることは間違いないだろう。しかしそれは最初全面的にか、あるいは少なくとも後にそうなるように単に部分的にだったのか、スワンという人物の構成要素としても考えられていたわけである。ちなみに Santeuil は Swann という名の形成にも関与していると思われるが、その際捨てられた残りの *deuil* の語尾はスワンが自分の心の兄弟だという Vincieu の命名に使われたのではないだろうか。未完の長篇小説の主人公の経験が主題的ユニテを保ちつつも何人かの人物に分散して受けつがれ、その中でも中心的な位置を占めるスワンの愛を物語る私が次第にこの主人公を蚕食してついに母屋に居直ったといった仮説をたてることも可能だろう。いずれにしてもスワンと話者は同根的存在であり、以下指摘する二人の類似性は決して偶然ではなくたように思われる。

(35) M. Raimond, *op. cit.*, p. 136

(36) この追放はまずヴェルデュラン夫人のサロンからの排除によって具体化される。この排除は、それによってスワンがオデットと会う妨げになるという点で重要である。なおヴェルデュラン夫人は閉鎖的な世界を維持し、常連に食べものを与えることに専念する、まさに母的な女性性なのであり、スワンにとってそういう意味でオデットのアルテル・エゴ的存在なのだ。

(37) 包むの母的性格については、J. Rosso, *Voies de l'imagination proustienne*, Nizet, 1980, p. 137-149, を参照。なお句いもマドレーヌ以来 (母) と結びついているように思われる。「カイエ26」では石けんや寝乱れたベッドの匂いが「忘れられた幸福な時代」(新 I, 962) と結びつき、「われわれにとって永遠に失われたように思われる」(……) 喜びが「実は永続的なものであることを暗示しているという [bid.]」。さらに枕に顔を近づけると、「忘れられた昔の夜々の匂い」がするともいう。これは匂いが幼児期の母子一体感を喚起することを語っているように思われる。

(38) Ph. Boyer, *Le petit pain de mur jaune*, Seuil, 1987, pp. 33-40.

(39) 注(36)で、ヴェルデュラン夫人の母的性格に言及したが、彼女の夫もこの〈母〉と結婚すると、フロマンタンに比較される美術批評の筆を折ったといわれ [III, 709]、そこにはスワン・オデットとの平行関係が認められる。

(40) 河島英昭編訳「イタリヤ民話集」(7)、岩波文庫、「眠れる美女と子供たち」。

- (41) Barbey d'aurevilly, *Les diaboliques*, Garnier-Flammarion, 1967.
- (42) S・カーン『肉体の文化史』、喜多迅鷹・喜多元子訳、法政大学出版局。
- (43) Rosasco, *op. cit.*, p. 137.
- (44) 母が女でもあった人への息子の復讐をここに見ることも可能だろう。
- (45) Chateaubriand, *René loto*, 1988.
- (46) CSB, *op. cit.*, p. 156-7.